現代美術の祭典

亀山トリエンナーレ2017

2017.9.24 》10.15

現代美術の祭典　亀山トリエンナーレ2017記録誌

お問合せ先

亀山トリエンナーレ2017事務局（森）tel.090-8950-3011　亀山市文化スポーツ室 tel.0595-84-5079

http://kameyamatriennale.jp

かめやま文化年2017

beyond 2020

亀山トリエンナーレ２０１７を終えて

亀山トリエンナーレ２０１７を無事に終了することができました。
多くの皆様のご協力、ご尽力のお蔭と心から感謝申し上げます。
夢に見た光景が現実に目の前に現れた３週間でした。
遠くはメキシコ、ＮＹから、また北海道、九州をはじめ全国からご参加くださった
１０１組のアーティストの皆様、ほんとうにありがとうございました。
思い起こせば２０１６年４月から８月までコンペティションを開催しました。
エントリーの条件は「亀山の場を生かした作品を展示してください」のみ。
同年１０月９日、ノミネートされた作家たちは亀山の地に赴き各自で展示場所を探索。
その結果、亀山トリエンナーレ２０１７には見事に「場」を生かした現代アートが街に
あふれました。亀山らしさを生かした新しい芸術表現も生まれました。
会期中に述べ２万人の来場者にお越しいただき、街に活気が満ちていました。
主催者としてこれ以上の喜びはありません。今回は東町商店街のみならず、旧東海道沿
いにも展示場所を増やしたことで来場者の皆様には、城下町亀山の歴史、文化を訪ねな
がら現代アートに触れていただけたことと思います。
亀山トリエンナーレ２０１７の開催により、多くの人々の心のなかに街を想う気持ちが
芽生え、未来を考えるキッカケになったのではないでしょうか。
来場者の皆様、住民の皆様、参加作家の皆様、ボランティアの皆様、
行政の皆様、メディアの皆様、ありがとうございました。
２０２０年に向けて、一歩前に歩きだす勇気をいただきました。

亀山トリエンナーレ２０１７実行委員会
代表・伊藤峰子
実行委員一同

亀山トリエンナーレ２０１７を終えて

監修：井上隆邦（三重県立美術館元館長、
横浜トリエンナーレ２００５事務局長）

今回で２回目を迎える亀山トリエンナーレは小雨の降る中、３週間に亘る会期を終え２０１７年１０月１５日無事終了した。参加作品は質量共に前回のリエンナーレを大幅に上回るものであった。また、展示会場である民家や空き店舗に非日常的な作品群が持ち込まれた結果、「化学変化」が起こり、「場」の趣きが一変したことも指摘しておきたい。「場」の問題を入念に研究した参加作家の成果であろう。一方、ボランティアの方々や報道機関による支援も忘れることが出来ない。こうした支援がトリエンナーレを成功に導いた原動力であったことは言うまでもない。特にＩＴ技術、電気工事、映像撮影などの面でその専門性を発揮したボランティアの存在は大きい。

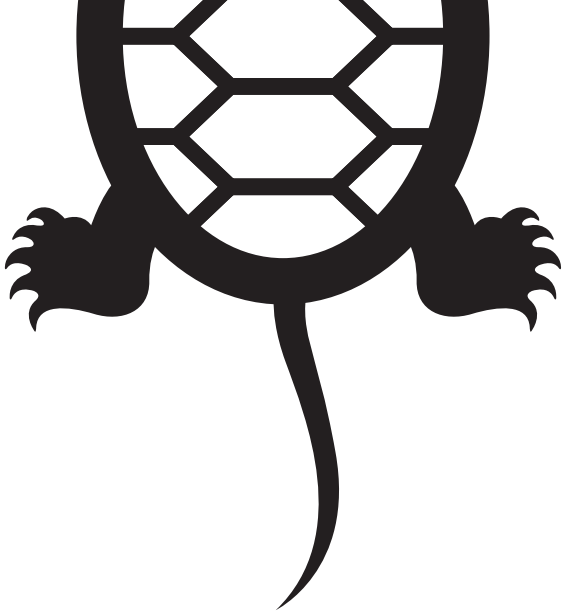
亀山トリエンナーレは、「新人の登竜門」と「国際交流の促進」という方針を掲げている。「新人の登竜門」に関しては、公募による参加者が１００名前後であったことからも一定の成果を収めたと思う。また、「新人の登竜門」という言葉から「若者」を連想し勝ちだが、参加者は若い人ばかりではなかった。プロの建築家や写真家などが、その活動の幅を広げた　いとの思いから参加した事例もあった。「国際交流の促進」に関しては、日本在住の方々も含めれば５－６カ国の作家が参加したことになり、世界に開かれたトリエンナーレを目指す上では貴重な一歩となった。社会のグローバル化が急速に進展する中、「国際交流の促進」は今後とも重視すべきテーマであろう。

次回のトリエンナーレは３年後に開催される。参加者の公募までの期間は２年余り。準備期間は限られている。一方、資金調達、人員体制を含む事務局運営のあり方、県外を対象とする広報の充実など残された課題は多い。こうした課題を実務的に克服する中で、素晴らしいトリエンナーレを目指してほしい。

『亀山トリエンナーレ 2017』によせて

亀山市長　櫻井義之

新進気鋭の作家の皆様をお迎えし、亀山の秋に彩りを添えていただいた
『亀山トリエンナーレ 2017』の大成功をお慶び申し上げます。
全国津々浦々さらには海外からご参加された過去最多 102 組の作家の皆さんの
渾身かつ個性豊かな作品は、主会場となった東町商店街と旧東海道の佇まいが残る
西町の風致と調和し、市内外の多くの方々を魅了する祭典となりました。
とりわけ、西町の旧舘家住宅、加藤家屋敷跡では、歴史が織りなす凛とした空気感
と現代アートとの不思議な融合は、それぞれの価値と魅力を相互に高め合い、
「文化のチカラ」が人々の交流を促進させ、まちを活性化させるサプリメントとなる
ことを体感する機会ともなりました。
実に、第 1 回「アート亀山」の開催から 10 年、以来、現代美術の祭典をこの地に
根付かせ育ててくださいました伊藤峰子代表・森敏子事務局長はじめ実行委員会の
皆様の情熱あふれるご尽力に敬意と感謝を申し上げます。
さらに、元三重県立美術館長の井上隆邦様には、今日まで大所高所からのご鞭撻を
いただいてまいりましたことに厚く御礼申し上げます。
　結びに、今後も『亀山トリエンナーレ』が皆様の英知と更なる進化により一層の
ご発展をいただきますとともに、ご参加いただきました作家をはじめ関係者の
皆様方のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。



CONTENTS

ご挨拶	P1	ー	P3
会場マップ	P5	ー	P6
スケジュール	P7	ー	P8
出品作品	P9	ー	P44
亀山トリエンナーレ賞	P45		
現地ツアー〜搬入、前夜祭	P46	ー	P50
アートディスカッション	P51	ー	P57
アートイベント	P58	ー	P68
recollections	P69	ー	P90
メディア・広報物	P91	ー	P104
ご協賛いただいた皆様	P105		
お世話になった皆様	P106		
編集後記	P107		

アーティスト
Main Exhibition Artist

		19	田中 七星	35	寺本 美穂
		20	生	35	浅野 言朗
		20	Maigorock(JUST ART PROJECT)	35	伊藤 廉
		21	吉永 蛍	35	MIWAEL
1	日々工作隊(小玉一徳・桑原宏明)	21	濱口 新平	35	おおたはるか
1	藤村 憲之	21	Akariya	35	冨永 敬 と 増田 雄太 と 大西 拓人
1	田村 公男	21	山田 風雅	35	千秋
2	伊藤 龍彦	22	藤田 昌久	35	KAO'RU
3	北村 章	23	森 敏子	35	鈴木 雅明
4	市川 雄康	24	木全 靖陛	35	武井 琴
5	上田 佳奈	24	北村 拓之	35	本間 メイ
5	中尾 広道	25	占部 紗也香	35	三木 みどり
5	諸川 もろみ	26	伊賀上 良太/伊賀上 浩美	35	宮嵜 浩(BOMBRAI　WEST)
5	ホリタイキ	27	鮫島 弓起雄	35	森 博幸
5	落合 有紀	28	池上 太郎	35	倉岡 雅
5	CHIE	28	宙宙	35	長縄 功太郎
6	A(c)	28	鶴田 功生	35	加藤 涼子
6	成田 敬	28	寺澤 静	35	中島 世津子D.
7	Ka Ena	28	橋本 次郎	35	小坂 洋一
8	岡本 優希	28	Kakuta Takuya	35	松本 善造
9	藤原 史江	28	Kei Minoura	36	深尾 尚子
10	堂本 清文	28	ゆうすけ	37	榎本 奈々子
11	クボタマミ	29	天野 入華	37	大岡 英介
11	中屋 一如	30	平井 孝典	37	菅尾 博司
11	内藤 久嗣	31	市ノ澤 萌々子	37	吉田 葵
11	見掛 理之	31	加藤 史江	37	Picture
11	柳 哲也	31	Sam Stocker	37	田島 悠史
12	倉岡 としえ	31	廣瀬 加乃	37	山路 慎也
13	daisaku	31	Linda Dennis	37	山田 悠
14	竹之内 佑太	32	Natsuki Kohatada	37	norton
15	伊藤 明淑	33	稲垣 美侑	37	Omar Torres
16	清水 藍	33	櫻井 大吾	37	Hector Falcon
16	森本 紗月	33	れな	37	Megu Fukuda
16	井谷 うらん	33	Hiroshi Mehata	37	CAKE－HARA
17	守屋 友樹と和田 ながら	34	〈／n〉	37	渋田 薫
18	matsuoka-needle-company				

日時／各イベント日程10:00～14:00　開催場所／各会場

FOOD & SHOP

■美味しいものマルシェ［ふれあい広場、しぼりや］
土・日・祝日に身体に優しいお弁当を販売します。
日替わりシェフの美味しいお料理です。
9月24日(日)　ネチャメ、あいのや、カリー河、もぐらや
9月30日(土)　こぴら、もぐらや
10月1日(日)　ネチャメ、あいのや
10月7日(土)　こぴら
10月8日(日)　ネチャメ、もぐらや、地球食、かじまや、Neoベジタリアンみえ
10月9日(祝)　こぴら
10月14日(土)　こぴら、望仙荘
10月15日(日)　ネチャメ、カリー河

■オリジナルTシャツ販売中！！！
亀山トリエンナーレ2017のオリジナルTシャツを販売しています。
爽やかなシンボルカラーの水色と白！
会期中しか買えません！
お早目にお買い求めください。
販売場所／しぼりや、森本薬品、岡田屋本店

■亀山おみやげ市
亀山の特産物を販売します。お土産にどうぞ！！
10月8日(日)　販売場所／猫の館前

市内の飲食店が期間中、アートな特別メニューを提供します。
※詳細は店頭にて

うえだ食堂、千元、アールグレイ、アメリカン、京屋、むかい、吉備路、喫茶佳、トラットリア イルテルノ、かふぇたいよう、月の庭(9.25/10.2/10.10)

展覧会場
Exhibition Map

亀山トリエンナーレ
展示場所案内マップ
QRコードでアクセス

展覧会場ナンバー Exhibition Place Number							
		9	森本薬品	18	高村書店	28	元万善薬局別邸
		10	なかや本店	19	7daysギャラリー	29	廣森宅
1	市民協働センター(みらい)	11	安部宅	20	アートガーデン崖の上	30	誓昌院門
2	東町商店街アーケード	11	安部宅奥	21	青木倉庫	31	明治天皇行在所
3	法因寺庭	12	ＪＤスタイル	22	山形屋酒店	32	岡田屋本店ギャラリー
4	はんの清水	13	肉のむかい	23	ナガイ種苗店倉庫	33	月の庭
5	元荒川楽器店	14	元中村商店	24	遍照寺	34	月の庭(庭)
6	元荒川楽器店裏　増田宅	15	元男子専科一二三	25	今井家	35	旧舘家住宅
7	プランタンさかきや	16	東町ふれあい広場	26	元山田靴店	36	西之丸庭園
8	サラダ館	17	喫茶佳	27	元ユリ理容室	37	加藤家屋敷跡

ART EVENT DAY

日時／ 9月24日［日］13:30〜　開催場所／亀山市市民協働センター

アートディスカッションⅠ　「新しい表現への挑戦」

■コーディネーター

井上 隆邦
国際交流基金に30年近く勤務。この間、パリでの「興福寺展」、ローマでの「日本美術の3000年展」、セントルイスでの「日本画の100年展」などを担当。その後、上越市副市長、横浜トリエンナーレ2005事務局長、三重県立美術館長を歴任。

■パネラー

おおたはるか
1993年5月4日生まれ。三重県鳥羽市出身。おもに水彩を使っています。ポートレートが好きです。

柴原 薫（KAO`RU）
ＮＹにてアシスタントを経てフリーに。
植物をモチーフに「自然が作り上げた造形美と人工物との融合」をテーマに写真を作り込むスタイルを貫く。

武井 琴
横浜市出身。立教大学卒業。コンテンポラリーダンスとコマ撮りを融合させたアニメーション制作に取り組む。

中島世津子Ｄ.［ビデオ出演］
美術家。パリ・エコールデボザール卒業。松阪の古民家で創作。日々、土と草木と夜空と周りの小動物達が醸し出す時間に身を置きながら。

日時／ 10月8日［日］10:00〜15:00　開催場所／亀山市東町商店街

歩行者天国　楽しいアートイベント＆美味しいものがいっぱいです！

■子どもたちのパレード
Kei Minouraによる学校ワークショップの集大成！大人も子どもたちも一緒にダンス！　時間／ 11:00〜

■亀山モンマルトル
大人も子どもも亀山の風景をスケッチしよう！　受付／亀山市市民協働センター　画紙・クレヨン準備しています。

■公開制作
①ユイ・ステファニーによるペインテング。（長いキャンバス）　②モデルを描こう。（大きなキャンバス）

■似顔絵広場
松阪似顔絵倶楽部による似顔絵（有料）　日・祝日も開催

■ガイドツアー
伊藤龍彦によるアートガイドツアー。　時間／ 13:30　場所／亀山市市民協働センター〜亀山市

■ネイルアート
岡本優希によるネイルアート。（有料）

■アートなチンドンやさん
ポズック楽団によるおもしろおかしなチンドンやさん！

■ダンスパフォーマンス
濱口新平とそのグループによるダンス。　開催場所／青木倉庫前

■木工教室　木のパズル、森の時計づくりなど。（定員制）
主催／亀山材木産業組合＆亀山市森林林業室

■パフォーマンス
「absense-その場に居合わせない人のダンス」　akari by </n>　時間／ 18:00 〜　開催場所／月の庭

■ワークショップ
「刺繍でワッペンを作ろう！」　matsoka-needle-company　時間／ 10:00 〜、13:00〜（有料）　開催場所／高村書店

■ワークショップ
「缶バッチを作ろう」（有料）　開催場所／しぼりや

日時／ 10月8日［日］15:00〜19:30　開催場所／加藤家屋敷跡

EXPERIMENTAL NIGHT　映像と音楽を使ったパフォーマンス

■ヴィジュアル＆サウンドパフォーマンス
大岡英介、Sayoko Hirano、Gaiamamoo、Kakuta Takuya

日時／ 10月14日［土］13:30〜　開催場所／亀山市市民協働センター

アートディスカッションⅡ　「新しいアーティスト・キャリア〜地域アートと地域とアート〜」

■コーディネーター

田島 悠史
小規模地域アートイベント研究者兼芸術家。環境芸術学会理事。みなとメディアミュージアム創設者。宝塚大学メディア芸術学部講師。

■パネラー

深水 隆司
昭和56年 亀山市役所入庁。平成18年 市民参画協働室に配属され、長年にわたり、市民活動支援や地域づくりに関わる。現在、亀山市市民文化部参事兼地域づくり支援室長。

冨松みね子
1948年生まれ。家業の薬屋を約35年経営。2008年「まちおこし」としての東町商店街とアートのコラボレーションが、今日の関わりの始まり。

成田 敬
種子島芸術祭プレイベントや徳島アートフェスティバルなどに参加。磁力や光など形が流動的なものを素材に作品を製作。

森 敏子
商店街の皆さんと亀山トリエンナーレを創設。2008年より事務局を担当。子ども絵画教室アトリエ・エピ主宰。洋画を制作。長年、亀山で文化芸術振興活動に携わる。

日時／各イベント日時　開催場所／各会場

パフォーマンス・公開制作・ワークショップ

■パフォーマンス「 山と海に貼り付けた 」
守屋友樹と和田ながら　日時／ 9月24日（日）13:00 〜、16:00 〜　10月8日（日）13:00 〜、16:00 〜　開催場所／喫茶 佳　駐車場

■ダンスパフォーマンス
武井 琴　日時／ 10月15日（日）13:00 〜 13:15　開催場所／旧舘家住宅

■蝋燭点灯（定員制）
AKARIYA　日時／ 9月24日（日）、10月1日（日）、10月15日（日） 14:00〜　開催場所／青木倉庫

■パフォーマンス「 Popcorn Bath 」
三木みどり　日時／ 9月24日（日）、9月30日（土）、10月1日（日）、10月7日（土）、10月8日（日）、10月9日（月・祝）、10月14日（土）、10月15日（日）12:00〜16:00　開催場所／旧舘家住宅

■大理石つるかめ公開制作
森本紗月　日時／毎日　開催場所／ふれあい広場

■VIDEO MUSIC
kakuta takuya　日時／ 10月7日（土）15:00 〜 16:00　開催場所／元万善薬局倉庫

■マルチコアストリーミング
竹之内 佑太　日時／ 10月7日（土）〜10月9日（月・祝）10:00 〜 17:00　開催場所／元中村商店

■ワークショップ「 綴る一着 」
クボタマミ　日時／毎日　開催場所／阿部宅

日時／各イベント日時　開催場所／各会場

学校ワークショップ＆パレード

■ワークショップ「 映像空間とあそび・おどり」
Kei Minoura、柴田真実、市川鼓乃美
日時／ 9月26日（火）、9月29日（金）、10月3日（火）　開催場所／亀山市立西小学校
日時／ 9月27日（水）、9月28日（木）、10月2日（月）　開催場所／亀山市立東小学校

私たちを取り巻くメディア環境は急速に変化し、世の中の暮らしがすっかり塗り替えられようとしています。その中でメディアテクノロジーとしっかり向き合う教育と、どんな変化にも対応できるカラダの育成が必要とされています。体育館でプロジェクター５台を使い、映像空間の中でカラダを使ったあそびやおどりのワークショップを開催します。

■パレード「 るるる ~留流留 」
日時／ 10月8日（日）11:00 〜　開催場所／東町商店街
Kei Minoura、柴田真実、市川鼓乃美

「映像空間とあそび・おどり」のワークショップを体験した亀山の子ども達とともにパレードを行います。古来、日本の東と西を分ける要所として亀山は存在し、関東と関西を陸路で横断する場合には必ず通過される土地として歴史の全てを見守ってきました。あらゆる時代の流動性を受容しそして送り出してきた、亀山の神秘的な遺伝子を取り入れながら、現代の新しい演出とともにパレードを行います。どなたもどうぞお気軽に、歩行者天国の商店街を共に練り歩きましょう!

出品作品

1. 小玉一徳・桑原宏明（日々工作隊）

『亀山関所』

訪問者に「アート手形」なるものを
発行する仮設の機関。
亀山トリエンナーレ期間中の
非公式の通行手形を発行します。
訪問者は、専用スタンプを押し
名前と日付を記入。
みなさまの旅の道中の無事を願っています。

1. 藤村憲之

『ほほえみの光』

多くの子供たちに楽しんでいた
だけて、とても嬉しいです。
インタラクティブな作品を確実に
街の中で動かすことには発想と
技術の上で私にはまだ大きな
課題があり、これからも街の
風景を作る活動を続けてまいります。

1. 田村公男

『亀山・ＫＡＭＥＹＡＭＡ
／かめやま』

モダンアートを創っているわけではない私が
毎回亀山の風景を出展しています。
デュシャンは１００年近くも前に
「飛行機が飛ぶ時代にイーゼルにカンバス
はナンセンス」だと言いました。
時代遅れの画家は今後も出品し続けます。

2. 伊藤龍彦

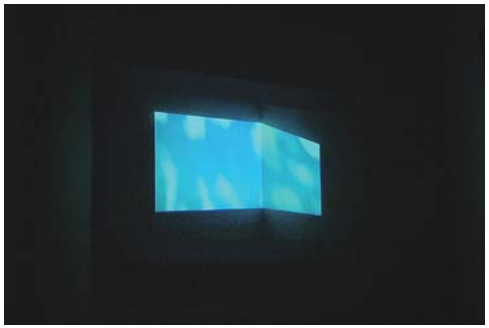
『東町商店街のお二人』

シャッターの下りた一軒一軒に
物語があると思います。
御縁のあったお二人をシルエットで
表しました。

4. 市川雄康

『つつみ０　ー余情ー』
『つつみ７　ー空ー』
『つつみ９　ー謡ー』

店頭の水草やメダカの「和」を
感じさせるムードに合わせて、
折り紙を題材とする作品を
展示させていただきました。
全国各地からみえた方々の笑顔に
出会えた亀山空間でした。



5. 上田佳奈

『レセプター』

宿場町であった亀山で、光の旅を
テーマに映像作品を制作しました。
新しい表現に挑戦できる場をいただき、
また亀山の皆様、作家の皆様に支えられ、
たくさんの学びがありました。
素敵な時間をありがとうございました。

5. 中尾広道

『「みちくさ」「船」「風船」』

僕の作品は短編映画です。
今回のトリエンナーレでは、
普段あまり映画館に来られない
お子様から、ご年配の方々にまで、
幅広くご覧いただきました。
様々なご意見を頂戴し、
とても嬉しく、大きな励みとなりました。

5. 諸川 もろみ

『rhythm』

私は 6 年間吹奏楽部に所属していた。
その時はなんとも思っていなかった
ことが今になって不思議に変わった。

5. ホリタイキ

『荒川楽器店に於ける
インスタレーション』

多くの方に観覧頂き感謝しております。
このイベントの一員として参加、
創りあげる過程など充実した良き
思い出となりました。
心に残る機会をありがとうございました。

5. 落合有紀

写真上『はじまり』
写真下『おわり』

" おわり" と" はじまり" は対の作品になっており、
対極な物事を一つの空間に表した作品です。

5. CHIE

『FOPPISH GIRL』

私の分身である
ＦＯＰＰＩＳＨ　ＧＩＲＬ。
かつて楽器店とし沢山の音で
満ちていたこの「荒川楽器店」。
耳で聴こえなくても、
この場で流れる音を心で聴いて欲しい。
亀山と私、そして訪れた人々とが
共鳴したその音色を。

6. 笠井 祐輔

『Life is』

生命は美しい。
そして生命は時に風船のように割れやすい。
自身の経験を、
亀山という所縁ある土地の古民家に表現した。

6. 成田 敬

『Time scale』

作品は設置された増田宅に人が住んでいなかった期間に使われていたであろう電球の数を算出し、それをトリエンナーレの期間で消費する（実際にフィラメントが順に切れていく）というものです。
このトリエンナーレに参加して多くの人と出会い、とても充実した期間を過ごすことができました。

7.KaEna

『月のさざめき』

夜を照らす明るい月夜。
私たちの知らない世界で生き物たちがそれぞれの
物語を繰り広げているのではないでしょうか。
そんな幻想をブリキのようにぎこちなく動く作品にまとめました。
誰でも触って動かす事ができる、
どこか懐かしい感じを味わって頂きたくて…

8. 岡本 優希

『SABON.KASUMI』

慣れ親しんだ亀山で今年も展示をさせて
頂きました。
ネイルアートのワークショップでは
遠方からトリエンナーレを見に来て
下さった方など、普段お話出来ない
方との交流もあり、大変刺激を受けました。

9. 藤原 史江

『手当て ー薬で描かれた手ー』

サンドペーパーに薬で医師や看護師や
家族など患者さんに接する人々の手を
描いた作品です。描画に使われた薬が
絵の横に展示されています。
薬が彼らと同じように患者さんの日々に
携わっている様子をイメージしました。

10. 堂本清文

『PSYCHEDELIC ART』

行政をはじめ商店街の方々の熱い思いと
作家達の情熱が生み出してきた
亀山トリエンナーレ。
私個人においても、なかや本店さんに
お世話になりとても感謝しております。
特にスポットライトとお店の明るさは、
作品の清楚な雰囲気を演出してくれました。

11. クボタマミ

『綴る一着』

綴る：ことばを続けて文章をつくる・衣類を繕う
亀山で過ごす日々を綴った一着。

縫うもの・描くものをことばとして、
一日ずつ手をほどこしました。
一生枯れない花束をもらったきもち！
ありがとうございました！

11. 中屋一如

『日常の営為』

11. 内藤久嗣

『《残り我》nokoriga (2017)』

テーマは形態変化。
阿部宅はかつて家具職人が暮らし、
今や築 100 年を越える。
本作品は、その場の時空間により姿を変える。
間取りを模した L 字形に消臭ビーズを
敷き詰め、
そこにうごめく時と空気を表現した。

11. 見掛理之

『かお（主人）』

11. 柳哲也

『虫の巣と地平線』

地平線のその先に何があるのか僕には分からない

12. 倉岡としえ

『 garden・はな、はなと…』

今回は、JD スタイルさんの
素敵な空間にドローイングを
中心に花々の絵を置かせて
いただきました。以前にも増して
亀山の街に、人々の熱気と
あたたかな空気を感じることが
できました。
ありがとうございました。

13.daisaku

『第二近藤ビル 401』

不思議と落ち着く店内の雰囲気にぴったり
合った絵画の展示ができました。
むかいさんでは、特製メンチステーキや
亀山ラーメン、味噌焼きうどんなどたくさん
ご馳走になり、素晴らしい時間を過ごすこと
ができました。

14. 竹之内佑太、小林大悟、
今井裕基

『雫と河』

古く宿場町として賑わい、
人の交差点であった亀山。
この場所で描いた 3 日間、
多様な人の思惑が画面上で交差した。
残った画面を読み解く事は叶わないが、
痕跡の断片には触れられる。
絵を描く事と絵を見る事とは何か。

15. 伊藤明淑

『生きる』

亀山トリエンナーレに初めて
出品しました。
来場者も多く、全国から
参集した作家達の作品は
斬新で見応えのある作品ばかりでした。
参加できた事に感謝します。

16. 清水 藍

『出会え、話せ、
食せ、滾る広げ』

食卓に生まれ花開く子は
話し食し共に育まれ
新たな食卓を作ろうと
出会いを求め根を広げ
見つけたその場に唯一の花を
咲かせまた根を広げ続ける
自分と、亀山の人々を想い
制作しました。
素敵な出会いを
有難うございました。

16. 森本紗月

『つるかめ公開制作』

3 週間、制作場所を亀山の東町商店街ふれあい広場
におきました。季節の変わり目を感じながら、
商店街に流れる日常を聞きながら、
いつもと違う環境で石を彫った時間は
とても気持ち良かったです。

16. 井谷うらん

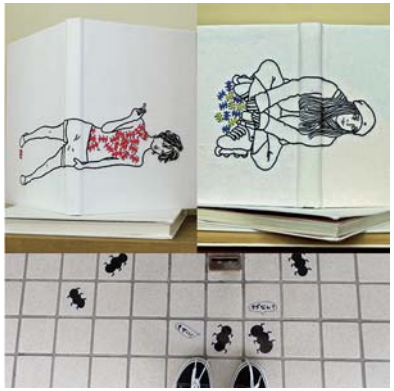
『Tiger→Butter ＿
トラがバターになる物語への
オマージュ』

亀山では、生きものをテーマに
その「場」を考えた
インスタレーションアートを
多く制作してきましたが、
今回は、私の作品の中で子ども達の
楽しげな歓声と走り回る姿を見て、
大変だったけど創って良かったと思いました。

17 守屋 友樹と和田 ながら

『山と海に貼り付けた』

共に京都が拠点の写真家の守屋と
演出家の和田のユニット。
坂上田村麻呂をモチーフに、
かつてあったこと、
あったかもしれないこと、
あったとしたこと、
このいくつもの時間と物語が融和
した状態を「現像」する試み。
撮影：守屋友樹



18.matsuoka-needle-company

『Ants next to you !』

私がいちばん見て欲しかったのは作品よりも
その空間なのです。
以前、アート亀山に遊びに来た際、
亀山で生まれ育った私でさえ訪れたことの無い空間、
匂いに触れることが出来た。
それでこそ亀山トリエンナーレだと。

19. 田中七星

『反復どこ飛び』

僕は、しぼりやの看板犬ムックに聞いた。
山々はホテルの窓から望めたけれど、
亀の姿は一体何処だい？
ムックは片耳だけ動かして答えた。
履物はいた亀が君の絵の中で乱舞し
ているでしょ？
蝉の音は既に消えていた。

20. 生

『日々、年月』

展示場所を貸して頂いた方との出会いや亀山の
土地、亀山でのご飯など、今まで訪れたことの
なかった場所で、こんなに町や暮らしている人
を近くに感じることはなかなか無かったので
貴重な体験ができました。

20.MAIGOROCK

『明日に飛び出せ坊や、
DJ 観音に出会う。

The Boy jumping into
tomorrow and meeting
DJ goddess of mercy

kiritoriart は様々な場所で展示しま
したが、いつも物足りなく感じて
いて、今回の亀山ではやり過ぎ
ぐらいやりきりたいと 4 ヶ月前程
から少しづつ製作し、搬入にも時間
をかけやり切れたのが嬉しかったです

21. 吉永蛍

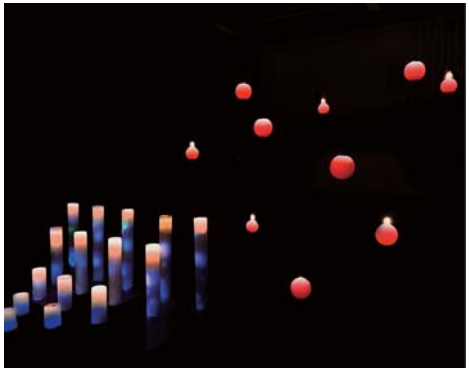
『landscape』

自然と人工物が
混ざり合い、
調和し、
新たな物語を
創り出していく。

21. 濱口新平

『「妖怪様御用達の
旅籠青木屋」への
オマージュ』

　階段の上は秘密の出入口。
妖精たちも亀山トリエンナーレ
のうわさを聞きつけて遊びに
きました。たくさんの素敵な
出会い。妖精も僕もほんとに
楽しい毎日でした。
今頃はきっと人間界のお土産話で
持ち切りかと・・・



21. Akariya

『「天」「地」』

世界中で古くから愛されてきた
蝋燭の光と現代を象徴する
光のひとつである、プロジェクター
から照射される CG アートが融合された
光のインスタレーションです。
デジタルとアナログが織りなす
2 種類の光を「天」と「地」
をテーマに制作いたしました。

21. 山田風雅

『色は匂へど散りぬるを』

自分は今回の亀山トリエンナーレで、
まちの中に作品を展示したり、
地域の方との交流や他の作家さんとのお話など、
とても刺激的な経験ができました。
三年後開催される時にはもっと力をつけて
参加したいと思います。

22. 藤田昌久

『亀山の風景』

今回の展示は、周りの空気に溶け込む
ような展示をしたいと考えていました。
店主の協力もあり、自分なりに充実した
空間になったと思っています。3 年後が
今から楽しみです。

23. 森敏子

『雲の家』

この古い倉庫は私が子どもの頃から、
この道の曲がり角に建っている。
秋空の陽射しに反射した雲の家が
キラキラと眩しい。多くの人の想いや
物語を紡ぎながら過ぎ去った
亀山トリエンナーレ 2017。

24. 木全 靖陛

『常しへ』

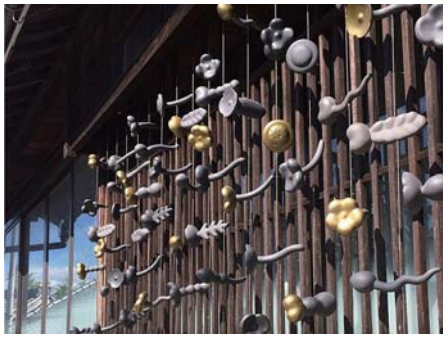
由緒ある遍照寺金毘羅堂での
展示における作品制作は
とても悩みました。
普段は平面画を描く私にとって
今回の礼節を重んじながらの
2.5 次元の世界表現はとても
新鮮で新たな自分を表現できた
と思います。

24. 北村拓之

『少し先の話』

『閃光』

『Heads』



25. 占部紗也香

『花のある風景』

この町に住む人、
この町を訪れる人、
そしてこの町に、、、
“花” をおくります。

26. 伊賀上良太 / 伊賀上浩美

『Untitled 483-671』

「全ては連続している」

27. 鮫島弓起雄

『モノクローム - ユリ理容室 -』

歴史あるユリ理容室の一部分を、
そっくりそのままモノクロの世界へと
変換する。場と作品がお互いの魅力を
引き立てあうような、
相互に良い影響を与えるものが
展開できたのではと思っています。

28. 池上太郎

『支度と後述 / Preparation or Postscript』

28. 宙宙

『万善薬局 蔵』

長年眠っていた蔵の、覆い被さった砂埃を
取り除くことで空間が息を吹き返し、
当時の輝きを取り戻し始めました。
そこに残された古物で空間を再構築し、
時間の枠を超えてなおそこにあり続ける
美しさを表現しました。

28. 鶴田功生

『思った通りに生きなさい』

自然との距離感や共存を意識し、
動植物の子細な表情を深く掘り下げた作品の制作をしている。
その表現方法は木口木版技法で制作し、
版画を平面に留めず、
版の特性である複数性を活かすことで制作を行っている。

28. 寺澤静

『なみまとうおり』

ただ観るだけでなく、様々な
視点から眺め、繊維の風合いを
体感し、纏うことで空気が流れる
様子を感じ取っていただけたら
と思い制作しました。
空気も水も人もやがて停まり、
溜まる。でも涼やかに軽やかに。

28. 橋本 次郎

『風の通り道』

糸と風鈴を用い、そこに自然の光や風を
反映させた作品。日の出と共に現れ、
日の入りと共に消えていく光の束。
風が通ると鳴る風鈴。
「風の通り道」は、その土地の時間や
風を感じさせる作品です。

28.KakutaTakuya

『VIDEO MUSIC / LUMINARA』

映像を音響化する試み。電子楽器
としてのビデオカメラ、
その可能性の探求。
本作品制作にあたって
ご支援いただいた
カメヤマ株式会社様、
改めて感謝申し上げます。

28.Kei Minoura + 飯島祥

『灯 ~akari』

旧東海道沿いに栄えた万善薬局を展示場所とし、
個別制御で発光する約 350 個の LED を、
高さ 5m の造形物に配置した作品を制作しました。
家主さんに出会い、
笑い合い共に過ごした時間が
何にも代え難い収穫でした。

28. 森下祐子

『くすりばな』

和室一室をお借りしての展示は
初めての為、試行錯誤しましたが、
事務局の方々や大家さんが相談に
乗ってくださり、形にすることが
できました。皆様のご協力に感謝
しています。とても良い経験に
なりました。

29. 天野入華

『あわいの表面』

“あわい” とは “間” のことで、
異なる 2 つの境目。
廣森家の縁側は制作意図にピタリとくる
場でした。
縁側で人が憩う景色のように、
私が制作を通じて可視化したい事象は
身近に在るかけがえのない場なのです。

30. 平井孝典

『ピース - 歪む空間、謎が生まれるとき -』

全国に世界に門戸が開かれている亀山トリエンナーレ。
現代美術を中心にジャンルにとらわれない表現を
街のあちらこちらに展開して、作家と地域住民が
作品を通して言葉ではない特別な意思疎通と空間表現を
演出している。

31. 市ノ澤萌々子

『Area』

行在所に身を委ねながら自然に対する
人間の姿勢のとり方について考えました。
それはなかなか説明しづらいのですが、
いたずらと似ているかもしれません。

31. 加藤史江

『ひとときのおくつろぎを。
～規則性と不規則性の
はざまで～』

展示場所は明治天皇が全国行幸で宿泊した
日本家屋。天皇に最上のおもてなしをした
当時の人々の資料から着想し、規則性と
不規則性の調和から生まれる心地よい
メカニズムを、薄葉紙とゆらめくロウソクの
炎の造形で表現しました。

31.SamStocker

『お城の下にあるもの』

The intention behind the work was to make a monument
from research into the history of Kameyama,
to occupy a site that included the castle gate and a school.
Playfulness underpinned the work.
The structure and scale of the work determined due to
the materials that were available,
an intervention that the viewer could crawl inside.
A private place in a public setting.

31. 廣瀬加乃

『こちよさ -KOCHIYOSA-』

今いる時間を沢山のモノと共有している
共有しているけど干渉はしない
干渉はしないけど無関心でもない
傍観しながらも見ている様な見ていない様な視線
安心できる居場所としてその空間があれば良いと思い作りました。

31.LindaDennis

『Ripple Effect』

Kameyama’s history and the energy of the people
were inspiring for me. I installed my artwork over the site
of the old well near Kameyama Castle,
and imagined the energy flowing out of the well.
I used net material to visualize my wish for vibrant
networks between people.

32.Natsuki Kohatada
『無題』

参加は二回目となる亀山トリエンナーレ。
今年も新作ファブリックにペイントを
行い、立体的な演出を施しました。

33. 稲垣美侑
『在りし日』

庭は生きている。
移ろう景色、空間に住まう生き物たち。
かつて人が、自然がくり広げた営みを、
そしてこれから何者かによって
生きられる場所を思い描きながら、
在りし日の庭の姿をめぐる光景を
かたちづくりました。

33. 櫻井大吾
『海のそのとき』

海に映る光や波の変化を
テーマにした作品。
布を重ねることで表現した。

33. 西村怜奈
『かげにあたって　あたってみえた
一時停止ボタン。』

コンセプトは命と生活の関係。
気持ちでは、命は重たい、もしくは軽いよね。と言われるが
実際はとても軽く、すぐに消えてしまうもの。
命に対する気持ちは戦争がある地域など生活環境で変化する。
この関係性を作品にした。

33.Hiroshi Mehata
『NOUM TD-1 Tsuki no Delay
おとがおくれてきこえるそうち』

鑑賞者のどこに焦点を当てるかにより
見せ方が変わってくる為、
分かりやすさと鑑賞者に委ねる部分との
バランスというものを考えさせられることが多く
年齢毎の目線誘導など、
今後も追求していきたい課題になりました。

34.〈/n〉
『absence- その場に居合わせない人への、
ダンス』

(始) この度私は、実験的な作品の上演をしました。
亀山という街を発信するために、私の身体を〈おとり〉にしました。

35. 寺本 美穂
『ルリモハリモ＋』

旧舘家という歴史ある建物での展示に感動しました。
部屋の雰囲気に合った六曲半双の古い金屏風を
探し 2 枚組写真を貼りました。
それぞれの写真は日常の中で見つけたささやかな
瞬間を私なりに切り取ったものです。

35. 浅野言朗
『Silk Screen』

亀山の歴史的産品である絹糸を用いて、
滝のように流れる亀山の美しい
「白雨」（歌川広重『東海道五十三次』）を、
比喩的に表現した。
絹糸は、微かな光とも響き合って複雑に輝き、
厳粛で艶やかな陰影ある空間を生み出す。

35. 伊藤廉
『Plates for Ambient 』

舘家が持つ場の力と作品を
どのように結びつけられるかと
考えた制作でした。
展示を終え、あらためて多くのことを
感じる中で、「考える必要はなかった。
力を抜いて場に向き合えばよかったんだ」
と気づかされました。

35.Miwael
『To dive into the inconsistency』

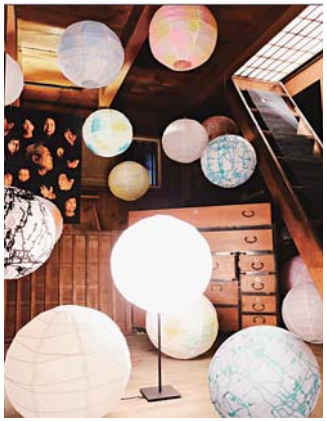
舘家を舞台に「不一致に浸る」というテーマで制作
に臨みました。
荒壁を活かしながらの展示は、
これまでに無い素晴らしい挑戦となり、亀山に
新たなアートの生命を生み出す役割を担うことが
出来たと実感いたしました。

35. おおたはるか
『あの娘、この娘』

建物自体がとてもかっこいいのでそれに負けないような
作品作りをしました。
亀山トリエンナーレを通して沢山の方に見て頂き
私という作家を知ってもらう事ができ大変充実した
展示になりました。有難うございました。

35. 冨永敬と増田雄太と大西拓人
『HUMANITY EXTENSION』

旧舘家一階和室にて貧乏ゆすりを行う
マネキンを展示しました。
人間の理想を模したマネキンに対し、
排除された貧乏ゆすりという要素を
インストールした本作は、
場の持つ力のおかげもあり
特別な空気を纏えたと思います



35. 千秋

『「感佩」(カンパイ)』

今回のタイトルでもあります「感佩」(カンパイ) には
" 心から深く感謝する" という意味があります。
いろんな方々のお力添えがあってインスタレーションで
表現できたこと、そして多くの人と繋がれた亀山に「感佩」

35. KAO' RU (柴原 薫)

『～身近にいる見えぬ存在～
歴史ある土地には、
その場を守る者たちが居る』

幼い頃、夢うつつの中で見た妖怪の類は、
実はその家に住む家守の神だった。
大人になって見えなくなってしまった
住人達だが、今もひっそりとその家々にいて
私たちの事を見守ってくれている。
そんな妖怪を表現した。

35. 鈴木雅明

『森を見る』

木の枝と影の関係性に注目した絵画を
制作しています。
今回は絵画と普段はモチーフとしている
木の枝に紙片を貼り付けたものをインス
タレーション作品として展示しました。

35. 武井 琴

『コマ撮り × ダンス at 亀山』

ダンスとコマ撮りアニメーションを融合させた映像作品を、
旧舘家住宅内で展示。最終日にパフォーマンス実施。
古くから大切に残されてきた文化財と豊かな大自然、
町の人々の温かいご支援のおかげで実現した作品です。

35. 本間メイ

『マイコの国に関する
私のノート -Catatanku
tentang negeri Maiko-』
『トコ・ジュパンを探して』

かつて身売りをされ、東南アジアに渡った
日本人女性たちに纏わる史実について、
アーカイブ資料や小説を辿り、
近代日本におけるジェンダー観を探っている。
助成 公益財団法人テルモ生命科学芸術財団

35. 三木みどり

『Popcorn Bath』

ストロベリーポップコーン等のフェイク菓子を
大量に用いて、かわいいを固有の在り方
ではない一つの状況や現象として起こし、
新しい美的価値感としての
『かわいいを超えた至福の概念』を
確立することを試みている。

35. 宮嵜浩

『屋根裏の祭壇
- 八百万 千万神の 神集ひ
集ひ座して 神分ち
分ちし時に -』

東海道の宿場である亀山は、
様々な人や文化が交錯する場所。かつて、
家の当主の持っていた宗教観を想像し、
キリスト教、仏教、イスラーム教、
ユダヤ教などが交錯した様々な神の集う
秘密の宗教部屋を制作しました。

35. 森博幸

『プロレスで、御座い』

プロレスには古典芸能にも通ずる固有の
様式があり、それらを日本画で描く。
そうすることで、新しい古典を表現
できるのではないだろうかと考えています。
今展示では、知略で戦う茶室を
プロレス会場に見立てました。

35. 倉岡雅

『態』

四畳半のキューブ空間。縁側越しの光、
そして何よりも旧家の風格。様々な展示制約。

F６号紙のドローイング６０点を展示。
直線的な空間と、女体のうねりとの対峙から
生じる「妙」を演出した。

35. 長縄功太郎

『想いの拡散』

2 回目のアート亀山から関わっています。

若いアーチストの意欲的な作品に刺激を受けて、
負けていられないという思いです。
今回アートの力・パワーのすごさを実感しました。

35. 加藤涼子

『おどるヒメ』

この作品は実験的に制作しました。
赤一色で女の子らしさ等が
どれぐらい出てくるのか。
それは
より強調され 調和されるものになりました。
細かい部分ですと
女の子の表情 、木版 独特の彫り後などの
ざわざわした感じを楽しんでもらいたいです。

35. 中島世津子 d.

『刻埋み』

畳の上に積まれた 43 枚の陶板の中の時間。
かつて、ケとハレの日を大切にして生きた
時代、この旧家の床に落ちた涙、
高天井に響いた笑い声、そんな事ごとを
妄想しながらの創作でした。
白土に黒泥、黒土に白泥で、
描き焼く試み、少々自らのパリ時代の刻も
混ざりながら…

35. 小坂洋一
『ノスタルジー』

現代アートとは程遠いステンレス作品を
展示していただき感謝申し上げます。
前夜祭には大勢の若いアーティストさん
達と楽しく交流でき、翌日は地元の商店の
優しい人柄の皆さんと作品を見ながら
会話をし、亀山が大好きになりました。

35. 松本善造
『朝日村』

「自然の営みを垣間見たい」
この思いております。
「亀山トリエンナーレ 2017」に
展示下さり感謝しております。
又、運営にご尽力された皆様の
チームワークの良さに多くの事を学びました。
ありがとうございました。

36. 深尾尚子
『ネズミの夢』

37. 榎本奈々子
『Like unrequited love』

不特定多数の方々の手紙があり、
それを読み書きできる作品です。
参加することで温かみのある体験が
できたり、反面リスクもあり作家である
私自身も手に負えない部分がありました。
ですが、亀山という場所であるからこそ
生かしてもらえた作品です。

37. 大岡英介
『YOMEIRI』

昭和初期、通常の結婚は当人達の合意
では無く両家の親同士、それも家長で
ある男性の考えのみで決定されるのが
普通だった。作品では嫁入り前の苦悩
から解放、決意へと向かう女性の人生
の始まりを描いてみました。

37. 菅尾博司
『金剛力士像』　他７点

菅尾さんは知的障がいがあるも特異な才能の
持ち主で、下書きなしで下方から描き上げて
いきます。加藤家屋敷での展示は、和紙と墨
で描いた作品はその佇まいにとてもマッチし
ていました。（菅尾さん支援者より）

37. 吉田葵

『KAIDO(庄野・亀山・関・坂下)』

歌川広重の描いた東海道五十三次 (亀山を含む四つの宿場)
を元に、私の視点で新しく描きました。
絵の中へ入り込んでいけるよう、
薄い布をレイヤードして奥行きのある展示をしました。

37. 須藤信 (グループ名：Picture)

『栄枯盛衰』

かつて宿場町として亀山の栄枯盛衰を表現した。
亀山にゆかりのある「加藤家屋敷跡」にて
AR による展示を行うことで、
より強くイメージを印象づける狙いがある。

37. 田島悠史

『Gate keepers』

今回、「亀山（トリエンナーレ）に周辺的
だが無関係ではない方」へのインタビュー
を実施しました。そのインタビューは、
作品制作を超え、私が今後、どう生きるか
まで考えさせるものでした。
私もまた変わります。
また、お話したいです！

37. 山路慎也

『波の華』

かつて地鎮のために埋められたとされる
刀が出土したこの場所で、
祭祀に用いられる紙垂をモチーフに
一振りの大幣を空間へとあらわした。
紙垂はそれ自体が様々な形で現れる
神性の表象であり、ときに” 清め” を
通して人やモノ、場所にその神性をうつし、
我々を対峙させる。

37. 山田悠

『HERE - inside』

「Here - inside」は、加藤家屋敷の一室を使い、
日時計を制作するプロジェクトである。
部屋の床が文字盤となり、
南向きの窓から室内に差し込む光によって
日時計は機能する。

37.NortonWilliams

『ネコを描いた少年

(The boy who drew cats)』

The Japanese folk fable "The Boy Who Drew
Cats" resonated with me completely as a young
boy when I read it in Japan. I was small, delicate,
and introverted. Constantly moving around
in the military every two or three years made
it difficult to build long-term friendships.
I withdrew a lot into my art. This boy's Art saved
his life and I was that boy.By going to Japan
I could bring my entire life full circle, going back
to where I became an artist.

37.OmarTorres

『The needle and the Stone』

Photography is an iconic representation much more codified than is usually admitted, in my projects I intend to create and capture ambiguous and evocative situations capable of transgressing the traditional perception of photography.

37.HectorFalcon

『枯山水紫』

These pieces go to contrasting and with a complicity between the Japanese aesthetics of the Iki and the WabiSabi, they do not try to conquer nature but to join it; I understood about art as man added to environment.

37.MEGU Fukuda

『No Justice, No Peace 』

何が本当で、正解で、考えるべき
なのか、答えが見つからなくても
心の奥で錆たものをまた輝かす、
そんなアートが生活に寄り添う
亀山トリエンナーレは人を楽し
ませたり、驚かせたり、考えさせる
素晴らしい取り組みだと思います。

37.Cake Hara

『愛阿武不逢筋王修』

加藤家屋敷を担当させて頂いた事で、
多国籍で異なる価値観のもとに空間を
作って行きましたが、違った視点から
色々なものが見え、積み重なった歴史を
知ることで、いかに場を尊重し生かす
べきかと、まずは自分の考えを白紙に
することができたのは貴重な経験でした。

37. 渋田薫

『Earth Concerto no.2
"Story of Kaguya"』

加藤家の先祖、藤原不比等を題材に
しました。高野山の枝に、和紙を
螺旋に巻きました。月の枝、陽の枝、
それぞれの根は地球の深い所で
結ばれます。先祖を辿れば一つ。
枝先には未来を感じる
みずみずしい玉です。

法因寺庭（3）は作家の都合により展示されませんでした。

亀山トリエンナーレ賞の発表について

今回展示された作品を慎重に選考の結果、以下の方々に亀山トリエンナーレ賞を贈ることになりました。制作視点のユニークさ、技術力などを中心に選考をおこないました。(監修・井上隆邦)

武井琴

身体表現としてのダンスとコマドリ映像を融合させた武井さんの作品は、その試みが斬新であり、表現の新たな可能性を予感させた。シンクロ技法を取り入れた映像ではトリエンナーレ開催地亀山の自然と風土が取り入れられ、映像の瑞々しさが印象に残った。ともすれば難解となりやすい現代美術作品を楽しく見せる工夫も見逃せない。

中尾広道

元荒川楽器２階に設けられた空間で上映された３作品は、いずれも入念な準備のもと制作されており、撮影技術、編集技術ともに優れている。静かな時間の流れを実感させる“物語性”が中尾作品の特色で、作家の更なる活躍が期待される。

笠井祐輔

見る側の感性や想像力を刺激し、多様で幅広い解釈を可能にする作品。老朽化した和室に浮遊する笠井さんの巨大な“胎児”は、そうした醍醐味を満喫させてくれる作品であった。風景に溶け込んでいるようで、溶け込んでいない“胎児”の持つ二律背反的な性格は、「解剖台の上のミシンとこうもり傘の偶然の出会い」という名台詞を思い起こさせる。作品と空間のバランスも良く、シュールな演出が目を引く。

▲武井琴

▲中尾広道

◀笠井祐輔

現地ツアー
2016.10.9

搬入
2017.9.23

前夜祭
2017.9.23

アートディスカッション

アート
ディスカ
ッション
(1)

日時 /9 月 24 日（日）13:30~
開催場所 / 亀山市民協働センター
コーディネーター / 井上　隆邦
パネラー / おおたはるか
柴原薫
武井琴
中島世津子 d.[ビデオ出演]

「新しい表現への挑戦」

アートディスカッション「新しい表現への挑戦」について

亀山トリエンナーレ 2017 監修：井上隆邦

トリエンナーレ会期中の９月２４日に、参加作家の中から経歴、作風、年齢の異なる４名を選び、アートディスカッション「新しい表現への挑戦」を行った。
ディスカッションでは参加者が映像を用いつつ、作品制作に関わる自身の考え方などを披露した後、日本における美術教育や作家活動に対する公的支援などを巡って活発な議論が交わされた。
一連の討議を通じて明らかになったのは、日本では美術ないしは芸術振興に関する社会的な基盤が未だ十分確立されていない実態だった。また、作家活動だけでは「食べてゆけない」といった深刻な現実も紹介された。こうした討議結果が今後、日本の文化政策に反映されることを期待したい。

ディスカションに参加したのは、おおたはるか、柴原薫、武井琴、中島世津子（ビデオ出演）の４名で、司会はトリエンナーレを監修した井上が担当した。

出展作家：おおたはるか

人前で自分の絵について説明する機会が今までになかったのでとても緊張しました。私は特にこういう風に作品を見てほしいとかこういう気持ちで作品作りをしているといった強いこだわりがない方なので、ディスカッションの機会を頂いた時、どういう風にしたら自分の作品に興味を持ってもらえるか、わかりやすく理解してもらえるかという事で悩みました。
人にわかりやすく伝えることで、自分自身でもこういう作品を作っている、こういった作品を作っていきたいなどきちんと整理して考えることができたなと思いました。人から見た私の作品の印象と自分で思っている表現が違うことが多くあり、それもまた楽しかったです。
ディスカッション後、展示を見にきてくれた方が数人いて色んな感想をいただき大変嬉しかったです。
こんなに貴重な経験ができてとてもよかったなと思いました。
今後の作品づくりにも生かせそうです。ありがとうございました。

出展作家：柴原薫（KAO’RU）

開幕初日のアートディスカッションに参加できて、とても素敵な機会を与えた頂いたと思っています。
自身の個展の場合は私の作品を既にご存知の方がほとんどで、新たな来場者の方も、その展示会場内での作品説明を行います。対して、亀山でのアートディスカッションは、私の作品を全く知らず、そしてまだ作品を鑑賞していない方々に対して、しかも、作品のある展示会場でもなく展示物を使ってでもなく、プロジェクターを使用しての作品説明や、アートに対する自身の意識を伝えなければならないと言う事が、非常に難しく、なかなか上手く伝えきれないことにもどかしさを感じました。特に、会場である舘家の雰囲気と作品が一つになっての展示作品となっていたので、ディスカッションでいかに多く語っても、その場の空気感はやはり足を運んで頂かなければ味わえない物なのだと改めて感じ、アートは現場第一主義だと再認識する事となりました。
今後は、そういったギャップをどう埋め、伝えていくかという事がこれからの課題だと感じました。

出展作家：武井琴

アートディスカッションでは、年齢やフィールドが異なるアーティストの方々のお話をお伺いすることができ、とても刺激的な時間を過ごすことができました。これまでの経験はもちろん、制作環境も実に様々で、日々感じていることや作品づくりにおいて大切にしていることを意見交換できたことは、自分自身の視野を広げることに繋がりました。同時に、日頃から感じている、アートに対する価値や必要性がなかなか日本の人々の中に根付いていかないという問題についても、改めて考えさせられました。
そうした中で、いかにして自分の活動の場を開拓していけるかが、これからの私の大きな課題です。
約１年前に夢に見ていたことを、亀山トリエンナーレで実現することができたのは、制作や展示に携わってくださった全ての方々のおかげです。
そういった方々との出会いに感謝しながら、今回のトリエンナーレでの経験を糧に、自身の活動のあり方について模索していきたいと思います。

アート
ディスカ
ッション
(2)

日時 /10 月 14 日（土） 13:30〜
開催場所 / 亀山市市民協働センター
コーディネーター / 田島悠史
パネラー / 深水隆司
冨松みね子
成田敬
森敏子

「新しいアーティスト・キャリア〜地域アートと地域アート〜」

アートディスカッション「新しいアーティスト・キャリア〜地域アートと地域アート〜」について

宝塚大学講師 , 出展作家：田島悠史

今回、おそらく他の登壇者からはとても快いコメントが、おそらく寄せられるだろう。それが予測できるほどに、アートディスカッションII「新しいアーティスト・キャリア〜地域アートと地域とアート〜」は、心地よい時間であった。
芸術家、実行委員会、地域住民、自治体関係者が一堂に会し、ポジティブかつ本音の議論を交わす。
途中、会場からの鋭い質問に、登壇者が鋭く返答する。異なる者同士が、それぞれの色を活かしつつ、一つのものを作り上げる。小規模地域アートイベントの「完成形」が見えた瞬間が､そこにはあった。
しかし「完成形」ということは、同時に変わらざるを得ないことを意味している。
実際、パネラーからは、東町商店街や実行委員会の今後についての言及があった。
東町商店街は変わるし、実行委員会は変わらねばならない。「完成形」ができた、と喜んでいる時間はあまりない。
この問題は亀山だけではなく、様々な場所で同時に起こっているように思えてならない。
今、記録誌を手に取っている皆さまに訴えたい。 亀山の、あるいは自らが関わる場所の、
次の「完成形」のために、自分たちができることは、何だろうか。

森本薬品店主：冨松みね子

パネルディスカッション開催前の事前打ち合わせは昼食を摂りながらでした。パネラー役は初めてなのでどうするのかがわかりませんでした。
事前打ち合わせというより、イベントの思い出や経験を話す時間を過ごし､私は勿論他のパネラーの緊張がほぐれました。
コーディネーターの田島悠史さんのねらいはここにあったのでしょう。ディスカッションの流れは自己紹介、テーマに対する回答、質問への答え、最後に一言ということでした。私はテーマとして､アーティストは地域に何を期待するのか?そして地域（アートイベント） はアーティストに何を期待しているのか？を選び、地域住民からの目線で話すつもりでした。とはいえパネルディスカッションのテーマが良く呑み込めていなかったので答えに苦労しました。
私は、地域イベントとしてのアートイベントを大して考えずに手伝っていただけでしたし、初日は頑張って日曜日も店を開けよう、最終日はやっと気を抜くことができるといったある種のストレス（刺激）を楽しむといった具合ですから言葉に表しようがありません。パネラーとして何とか言葉を引き出したというのが正直なところですが、小さな町の小規模なアートイベントの良さをもっと言葉に出来たら良かったと反省しています。亀山トリエンナーレ２０１７は作品を見に来る人々の多さに驚いたり、「アートってようわからんけどなんかすごいなあ」と評する町のおばさん達と同様、感動とストレスに満ちた３週間でした。

出展作家：成田敬

このアートディスカッションは自分の普段の考えをまとめ、そして他人と共有して議論するというとても貴重な体験になりました。
「地域アート」に関わる住民、市役所、アーティスト、事務局、それぞれのアートイベントに対する思いがバラバラであることがとても面白く、それぞれの思惑が見え隠れするディスカッションになっていました。私はディスカッション内でアートイベントに求めるものとして「作品を展示する環境」を挙げさせていただきましたが、この亀山トリエンナーレ会場は歴史のある文化財という美術館的な展示エリアと商店街や倉庫など、フレキシブルかつ特徴的な空間がある、魅力的な環境でありました。そのためこの良い環境下の芸術祭を存続していっていたくため、より多くの作家が集まる芸術祭の仕組みづくりを発展させていっていただければと思いました。
今後は、また展示の機会をいただけるよう自分自身も作品の発展に励んでいきたいと思います！
このたびは貴重な体験をありがとうございました。

亀山市市民文化部参事兼地域づくり支援室長：深水隆司

平成１９年に「アートによるまちづくりを考える会」が設立されて以降、市民の皆さんが中心となり、アートを切り口としたまちおこしに取り組まれてきました。そして、平成２６年からは「亀山トリエンナーレ」として開催されるまでに進化を遂げたのは、皆さんの努力が実を結んだ結果であり、事業の当初から関わらせていただいた者としては、感慨深く思います。
亀山トリエンナーレの特徴は、「場を生かしたアート」をテーマに店舗や空き屋等を活用していることにあります。
そこから作家と地域の方との交流が生まれ、地域の活性化に繋がっていく契機になるのではないでしょうか。
また、作家は自らの作品の完成度を、地域はまちの活性化を、実行委員会はイベントの成功を、といったようにそれぞれ目指すものは違えども、ベクトルが一致したときには、大きな効果が生まれるものと感じました。
これからも亀山トリエンナーレを通じて新しい交流が生まれることを期待します。

亀山トリエンナーレ事務局長：森敏子

亀山トリエンナーレ２０１７の最終日前日に開催されたアートディスカッションⅡ。コーディネーターの田島悠史さん提案のテーマは「新しいアーティスト・キャリア～地域アートと地域とアート～」。
なんて深くて難解なテーマなんだろうと、しばらく悩みました。
全国に数多くあるアートフェスで、何度も「地域アート」と言う言葉が使われているが「地域」と「アート」はそもそも上手く交差するものなんだろうか。そこに住む人々にとって、いきなりやってきた作品を、どう見てくれるのだろうか。主催者側がアートを見るのは愉しいでしょって街の人たちに押し付けているのではないのだろうか。若いアーティストたちは、亀山に何を期待しまた何を得たいと思って来てくれるのだろうか。「場」を生かしているアートですって、胸をはって地域の人々に主張できるのだろうか。行政、街の人、実行委員会との温度差によるズレがあるのではないだろうか。

亀山トリエンナーレ２０１７の事務局を引きうけながら（また、作家として作品を制作しながら）常に、複雑な思いを抱いていましたが、アートディスカッションで主催側のパネラーとして意見を延べ、また他のパネラーの方の言葉を聞いている時間のなかで、私の中でグルグル回っていた疑問に、ひとつひとつ答えが出されていくのを感じました。開催までの日々、未熟な知識で考えていたこと、クヨクヨと悩んできたこと、ぶつかってきたこと、独りよがりだったこと、期待しすぎていたこと、、、、
いろいろ考え悩んできたことすべてが、今日という日を迎えるために必要なことだったのだと明快な解答が出たのです。

それぞれの立場のパネラーの方の意見を聞いて、特に感じたことは次の３点です。

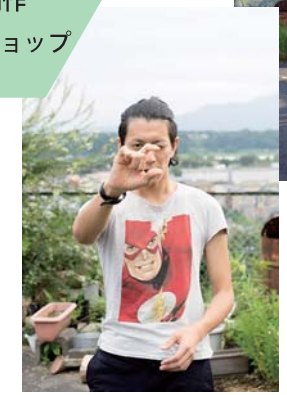
地域の人が作品に触れて、昔の街の記憶を呼び起こしてくれたこと。今田テーラーさんを描いた白い絵（伊藤龍彦作品）を見て「亡くなった親父がこの店で僕に初めての背広を作ってくれました。その時の記憶があの絵を見て急に蘇り涙が出ました」と後日、メールをいただきました。

その土地の時間や自然や建物に触発されて新しい芸術表現が生まれたこと。鈴鹿山脈を舞台装置として捉えたパフォーマンスや各展示場所で見られた「場」「時間」「出来事」などを見事に生かした作品の数々。どの作品と対峙しても「物語」を感じ言葉が溢れ出しました。来場者からもそのようなご意見をいただきました。

それぞれの立場の人たちに街を思う気持ちが芽生え、街を考えるキッカケになったこと。商店街を歩く人の波、亀山の文化財建造物に並ぶ行列。街の人たちや、行政、観光協会などの方々から「芸術祭って凄い」と言っていただきました。亀山茶のことを知ってもらう企画にも大きな反響がありました。

ディスカッションの議論の最後に「さて、トリエンナーレが終わった亀山はどうなっていくのでしょうか」という質問が投げられました。今、ささやかですがアートを生かした賑わいづくりの創出の仕組みを考え実行しようとしています。街の人たちも協力的になって来ていただいています。亀山トリエンナーレ２０１７で多くのアーティストと知り合いました。彼らが私の、そして亀山の財産だと信じています。
来る２０２０年に向けて、前に歩み出す勇気が湧いてきています。
そんな思いを強く持てたのもディスカッションに参加した効果だと思っています。
有意義なアートディスカッションでした。

パフォーマンス
公開制作
ワークショップ



■パフォーマンス「山と海に貼付けた」
守屋友樹と和田ながら
日時 /9 月 24 日（日）13:00~、16:00~
10 月 8 日（日）13:00~、16:00~
開催場所 /17・喫茶　佳　駐車場

■ダンスパフォーマンス
武井琴
日時 /10 月 15 日（日）13:00~13:15
開催場所 /35・旧舘家住宅

■蝋燭点灯
AKARIYA
日時 /9 月 24 日（日）、10 月 1 日（日）、
10 月 15 日（日）14:00~
開催場所 /21・青木倉庫

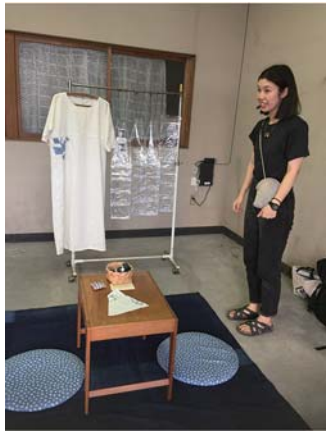
■VIDEO MUSIC
KakutaTakuya
日時 /10 月 7 日（土）15:00~16:00
開催場所 /28・元万善薬局倉庫

■マルチコアストリーミング
竹之内佑太
日時 /10 月 7 日（土）～10 月 9 日（月・祝）
10:00~17:00
開催場所 /14・元中村商店

■パフォーマンス「Popcorn Bath」
三木みどり
日時 /9 月 24 日（日）、9 月 30 日（土）、
10 月 1 日（日）、10 月 7 日（土）、
10 月 8 日（日）、10 月 9 日（月・祝）、
10 月 14 日（土）、10 月 15 日（日）
各 12:00~16:00
開催場所 /35・旧舘家住宅

■大理石つるかめ公開制作
森本紗月
日時 / 毎日
開催場所 /16・東町ふれあい広場

■ワークショップ「綴る一着」
クボタマミ
日時 / 毎日
開催場所 /11・阿部宅



歩行者天国

日時 /10 月 8 日（日）　10:00~15:00
開催場所 / 亀山市東町商店街

■亀山モンマルトル
大人も子どもも亀山の風景をスケッチしよう！

■公開制作
①ユイ・ステファニーによるペインティング
②モデルを描こう

■似顔絵広場
松阪似顔絵倶楽部による似顔絵

■ネイルアート
岡本優希によるネイルアート

■アートなチンドンやさん
ポズック楽団によるおもしろ
おかしなチンドンやさん

■ダンスパフォーマンス
濱口新平とそのグループによる
ダンス。

■木工教室　木のパズル、森の時計づくりなど
主催 / 亀山材木産業組合＆亀山市森林林業室

■パフォーマンス
「absense- その場に居合わせない人のダンス」
akari by 〈/n〉

■ワークショップ
「刺繍ワッペンをつくろう！」
matsuoka-needle-company

■ワークショップ
「缶バッチを作ろう」

■ガイドツアー
伊藤龍彦による
アートガイドツアー

伊藤龍彦さんのガイドツアーに参加させていただきました。
作家でもある伊藤さんから観た作品の解説は、作品の深いところ迄知ることが出来、作品の見方や、作品とのふれあい方を身近に感じる事が出来ました。
どの作品にも興味を持つことができ、最後まで真剣にお話を聞かせていただきました。
全ての作品を案内していただき本当に楽しい時間を過ごせました。
町中が美術館という感じで、気軽にアーティストの皆様や、現代アートにふれあえる良い体験ができました。ありがとうございました。

（参加者　寺田里美）

EXPERIMENTAL NIGHT

Visual&Sound Performance

10 月 8 日（日） 亀山藩加藤家屋敷内
15:00~19:30
出演 /Sayoko Hirano, Eisuke Oooka, Gaiamamoo,Kakuta Takuya

「Experimental Night」を終えて

EXPERIMENTAL NIGHT ディレクター：大岡英介

今回、亀山トリエンナーレ 2017 内のイベント「Experimental Night」の企画をディレクター担当させて頂きました。まず Experimental（エクスペリメンタル）とは何か、所謂、実験行為の意味で「実験の、実験用の、実験的な、試験的な、試しの、試行的な、実験に基づく」。実験から得た前衛的なアートに対して現代音楽の潮流としても扱われますが、実験音楽とは、アメリカの作曲家・ジョン・ケージの導入した用語法として理解されています。大げさながら私がディレクターの役目を任されたのは、亀山トリエンナーレ 2014 のオープニングにて加藤家屋敷にて演奏させて頂いた事の経験と、自分もアーティストの傍、活動して他の前衛的なミュージシャンとの交流経験があるのと機材に対して少し把握しているとの事で、企画担当をさせて頂きました。自分の音楽や映像表現として、まともにギターを弾く行為に対して、音を増幅させる磁気装置やワイヤー、スプリング、壊れたオルゴールなどで音を生成するが、やはりギターを長年、弾いてるので、どうしてもコードや音階的な執着から離脱できず、自分では、それほど前衛的でもなく、また映像編集も含め「Experimental」などイベント名を付けるのも痴がましく感じておりました。

加藤家屋敷での企画は、亀山市指定文化財であり、セッティングするのにも非常にデリケートな建築とアーティストへの配慮、またお客様への配慮。そして、代々の加藤家の方々への配慮でありました。まずフライヤー（チラシ）に加藤家の陣羽織の写真を使用する事で、亀山市歴史博物館と加藤家に許可を頂く事から始まりました。亀山や加藤家の歴史を知る為に、何度か通った博物館だったので、小林館長、中川学芸員には、非常にお世話になりました。後は PA 機材に関しては一見政幸氏にお世話になりました。
今回、青森県弘前市から出演した角田聡と細野拓也のユニット「Kakuta Takuya」。ビデオカメラの映像をリアルタイムでスクリーンに写し出し、更にその映像信号を直にサウンドシステムに接続し、映像の可聴化を図る。サウンドを手がける細野氏が業務用機材のフイルターに映像端子を通し、加工しノイズを生成しながら、角田氏は、プロジェクター２台を使用しながら、映像にブラウン管ノイズ模様をデザインし構築して行く。2 人のパフォーマンスは、太くて単音なノイズ電子音が非常に魅力的だった。

「Gaiamamoo」（ガイアマムー）は、東京で活動しながらも国内外で活動する 2 人の若手音楽家、Shogo Haraguchi と Mehata Sentimental Legend による即興演奏ユニット。日本伝統的なデザインと色彩のサイケデリックなビジュアル。サウンドは、多彩なエフェクターに ipad やミキサー、リズムマシーン、そして Haraguchi 氏がベースサウンドを加工しアッパーな現代的ノイズサウンドを生成。
複雑に絡み合った電子ノイズの渦の中に浸ってると Mehata 氏の日本の伝統的なボイスエッセンスが混合しディープな Gaiamamoo 独自の世界観が溢れたサウンドだった。総合的にバランスの良いタイムテーブルだったと思う。

国内外、版画家でありライブペインターでも活動する Sayoko Hirano さんのパフォーマンスも Experimental Night の会場前、15 時から加藤家屋敷内の庭にて 2 時間のパフォーマンスが行われた。
既に数十人のお客様が、彼女の潔く書く絵に魅了され、ある人は動画や写真を撮り、ある人は、彼女の絵をまたデッサンしたり、そして加藤家のエントランスでは、音楽家のリハーサルが始まり、彼女もその音とセッションしながらパフォーマンスを繰り広げました。後、Sayoko Hirano さんの絵は厩屋に 10 月 9 日から展示されました。彼女とは既に 10 年以上の付き合いとなりますが、今回、加藤家屋敷の庭に鮮やかな紫色の円形模様を石に加工し作品を置いたメキシコの Hector Falcon 氏と加藤家屋敷のキュレーションを手がけた cake hara 氏の友人でもある。出会いは、昔、関西のアートフェスに参加した時、初めて彼女の絵を見た時に、生命力のある裸体の絵を見た。その裸体は日本の現代女性とは、程遠く、西洋美術史にあるルノワールの豊満な裸体のように、内側に潜む自由と存在感。そこには、昔、自分の父親が裸体の絵を描いていた時に見た力強い線と非常に良く似てたので、思わず声をかけ、そこからアート活動での付き合いとなります。

総合して自分の役割など、後から考えるとデレクションや雑用、自分のパフォーマンスを実行するには、非常に難しい立ち位置で、決して楽観的なものではありませんでした。シナリオのように企画書を制作しても、計画通りに進まないし、どうしてもイベントが無事に終わるまで、問題を想定して対応策を慎重に考えなければならない。終了時、何人かにお借りした機材の分別や運搬、自分がイベントの為に買い出して来た物の処理、cake hara 氏の協力でエントランス内の作品の展示を元どおりに戻す事など、なかなかスムーズにできる仕事ではありませんでした。自分は出展者の立場であり、または「Experimental Night」の企画責任者であり、出演者でもありながらも、最後に感じた事は、「疲れた」だけの一言ではなく「他人には決して見えてはいない」人との関わりが私なりにありました。
それは指定文化財である加藤家屋敷にて行事を行う為に、何人かの方々に「お願い」や「頼む」事の重要性でした。このイベントとは、ある意味、マイノリティー（少数派）であり、どの様なイベントなのかを誰よりも明確に把握していないと相手側には、上手く伝わらないし、でないと逆に不信感を与えてしまうと言う事。我々が当たり前に使う、わかりにくい言語やカタカナや英語を、どう説明するかにより「安心」して「納得」して頂けるかが、私、いや私達の課題でもあった気がします。関わる人達との軋轢など経験も含め、この「Experimental Night」までの期間が緊張の日々であり、普段、そんなに人と接触しない自分にとって、本当に貴重な経験ができたと感じております。そして、来て頂いたお客様に一番、喜んで頂けたのが、何よりも実行した甲斐がありました。
後、演奏の音量や時間など、ご迷惑にならないように亀山市の職員の川村つぐみ様から、近隣の住民に対応して頂いた事や、加藤家代々の方、実行委員の方々の備品や運搬、藤田昌久氏、伊藤幸一（猫）さんの協力により、無事に「Experimental Night」が終わりました。感謝。

学校ワークショップ＆パレード

■ワークショップ「映像空間とあそび・おどり」
Kei Minoura、柴田真実、市川鼓乃美
日時 /9 月 26 日（火）、9 月 29 日（金）、10 月 3 日（火）
開催場所 / 亀山市立西小学校
日時 /9 月 27 日（水）、9 月 28 日（木）、10 月 2 日（月）
開催場所 / 亀山市立東小学校

＜概要＞

私たちを取り巻くメディア環境は急激に変化し、世の中の暮らしがすっかり塗り替えられようとしています。その中でメディアテクノロジーとしっかり向き合う教育と、どんな変化にも対応できるカラダの育成が必要とされています。体育館でプロジェクター４台を使い、映像空間の中でカラダを使ったあそびやおどりのワークショップを開催します。

ワークショップを通して

亀山市内の小学校において児童 150 人を対象とした全 18 コマの踊りのワークショップを実施する、またとない貴重な機会をいただきました。たくさんの地元の方々の助力のもと、児童と共にどっしりと芸術に向き合うことができたことを心から感謝します。幅８m・高さ 2.7m の大型スクリーンを設営し、４台のプロジェクターでスクリーンと床と壁に映像を投影することで、体育館に３面の映像空間を作りました。身体をすっかり包み込む映像空間の中で、デジタル化していく私たちの暮らしと、一方で変わることのない身体あり方の見直しを図りました。
動く映像におおはしゃぎする児童の無垢な反応は、時として楽しく、時として荒々しく表れました。その中で仲間を感じ、自分と仲間と外の世界の関係を果敢に再構成していく児童の様子に、たくさんのインスピレーションと力をもらいました。
「答えなんてないんだよ、身体表現は自分がいいと思ったらそれが答え。」そう言ってもポカンと口を開けてわからない素振りをする。それでもみんなわかっていたのは、楽しいことと、自分が周りに影響を与えて、動きが生まれていたこと。私たちは毎日小さな決断を積み重ねながら世界を変えていっている。それが芸術であっても、踊りであっても、生活であっても、同じことなのでしょう。時に楽しく、時に荒々しく、けれど優しく踊り動いた、今回のワークショップが私を含めた参加者全員の小さな糧（かて）となっていけば幸いです。

■パレード「るるる～留流留」
Kei Minoura、柴田真実、市川鼓乃美
10 月 8 日 11:00 ～東町商店街

＜概要＞

「映像空間とあそび・おどり」のワークショップを体験した亀山の子ども達とともにパレードを行います。古来、日本の東と西を分ける要所として亀山は存在し、関東と関西を陸路で横断する場合には必ず通過される土地として歴史の全てを見守ってきました。あらゆる時代の流動性を受容しそして送り出してきた、亀山の神秘的な遺伝子を取り入れながら、現代の新しい演出とともにパレードを行います。どなたでもどうぞお気軽に、歩行者天国の商店街を共に練り歩きましょう！

パレードを終えて

予想を大幅に超える 52 人もの児童の参加があり、あやうく拍子木が足りなくなるところでした。ルールは簡単！ワークショップで学んだ踊りを１回踊ったら、いっせいに歩行者天国の街へと走りだす。出会う人に拍子木で挨拶、一緒に手拍子をしてもらう、リズムは「せーの、カカン・カン」。あとはそれの繰り返し。一斉に走り出すたくさんの児童の姿は、見ていて圧倒されるほどでした。通行人を取り囲んでは、一緒に手拍子をしてもらう。アートを通じてはじけるようなコミュニケーションが生まれました。
初めは戸惑っていた通行人の方々も、２、３回リズムをとればもう仲間となり、児童たちの底なしの元気で街全体が沸き立ちました。
45 分間全力で踊り、走り、拍子木を叩いたパレードの後には、一緒に踊ってきた児童との最後の時間。サインが欲しいと何十人もの子供が列を作ってくれたけれど、お別れが寂しくて笑いながら涙が出そうでした。協力してくれた実行委員のみなさま、ダンサーの真実先生、鼓乃美先生、また両小学校の先生方、心から感謝します。ありがとうございました。

（文・Kei Minoura）

亀山中学校
アートツアー

亀山トリエンナーレ記録誌によせて

亀山トリエンナーレ 2017 実行委員
（亀山中学美術講師）横山典子

10 月 10 日、11 日、12 日の校外学習で、亀山中学校 2 年生の生徒を引率し、亀山トリエンナーレの鑑賞に向かった。連日、雨降りが続いており天候が心配だったが、この三日間は晴れの日に恵まれ、生徒たちは明るく爽やかな日に作品を鑑賞することができた。校門を出た後、二手に分かれて加藤家屋敷と旧舘家住宅に向かった。会場に着くまで生徒たちは「どんなんがあるんやろ？」「絵ばっかりあるんかな？」など、鑑賞を楽しみにしている様子だった。

まず、加藤家屋敷では、建物の中に入ると Norton さんの色鮮やかな作品に「宝石みたい！」「きれい！」と目が行き、「よく見ると中になんか描いてあるよ」と興味津々の生徒たち。奥に進んでいくと、Falcon さんの『枯山水紫』に「岩に紫の丸がついててきれい」と反応していた。また、榎本奈々子さんの『まるで片思い』の前では、手紙を書く生徒が多く、現代アートに積極的に参加していたため、12 日には封筒がなくなってしまったようだ。

次に、旧舘家住宅では、建物に入ってすぐにある三木みどりさんの『popcorn bath』に多くの生徒が足を止めて見入っていた。古い建物にポップコーンが入ったバスタブがあるという状況に少し驚き、何かわからないけれど面白いと感じている様子だった。また、武井琴さんの『コマ撮り × ダンス at 亀山』は「いっぱい写真撮って繋げてるんかな？」「この場所見たことある」など、興味をもって観ていた。小坂洋一さんの『幼い頃の思い出』は「細かいところまで作ってあってすごい」と感心したり、金属という素材でも人間味があふれている様子を感じ取ったりしていた。ほかの作品も、「これは何だろう」「どんな意味があるんだろう」とそれぞれの素直な感性で鑑賞していた。

生徒たちは、日常の中にアートがあるという空間を存分に楽しみ、どの作品も興味をもって鑑賞していたと思う。学校へ帰る途中にも、「いつもの日常の中にないものがあるところが面白いんじゃないか」と言っている生徒もおり、亀山トリエンナーレの “場を生かしたアート” というポイントを自然と感じ取っていた。

普段現代アートに触れる機会のない生徒たちだが、亀山トリエンナーレを鑑賞し、なんとなく過ごしている日常に新しい視点が生まれたことと思う。今回このような機会を与えてくれた作家の皆さんや実行委員会の皆さんに感謝したい。

亀山中学校　２年生　コメント（抜粋）

豊田正大

一番好きな作品 → 大岡英介『YOMEIRI』

映像で映し出されていて、映画のようできれいだった。暗い所で始めのほうは暗い映像でホラーみたいだったけど、見て行くうちにすすんでいって、タイトル通り「YOMEIRI」するような明るい、そのような姿の女の人が表れていて、物語みたいだった。
いろいろな現代アートが見られて良かったし、楽しかった。絵ばっかりなのかと思っていたけれど「YOMEIRI」のように映像もあって良かった。単純にうまい絵、すごい工作というよりは、独創的で作者らしい作品などを現代アートというのかなと思った。

若林拓武

一番好きな作品 → CAKE-HARA『愛阿武不逢筋王修』

この作品を選んだ理由は僕も男なので、武士がカブトなどをかぶっている姿を見てロマンを感じたからです。歯までちゃんと作ってあったり、カブトやヨロイなどもキメ細かく、丁寧に作ってあってすごく美しいなと思いました。この作品を作った CAKE-HARA さんはとても武士が好きなんだなと僕は感心してしまいました。
西町・加藤家屋敷跡にも、旧舘家住宅にも現代アートがいっぱいありました。僕ははじめ、美術館のようによく分からん点や線で描かれている図形をずっと見るのかな～？と思っていたけど、ポップコーンの風呂や貧ぼうゆすりする人形など笑わせてくれるような作品もあって、少し芸術にうとかった僕も分かったような気がしました。

福井洸樹

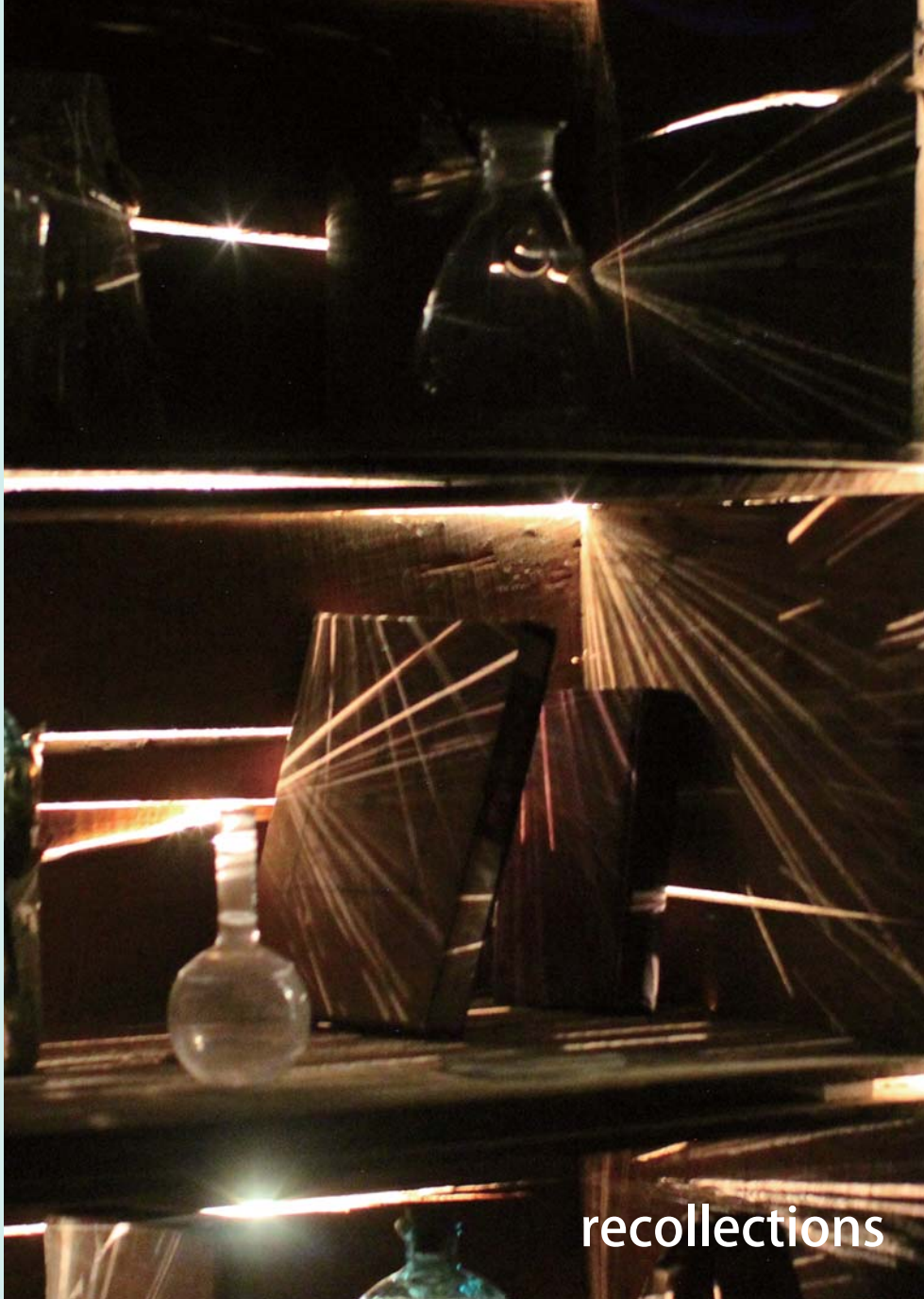
一番好きな作品 → OmarTorres『針と石』

この作品は大きな石を、とても細い針が支えているというもの。作者は石を世界、針を人にたとえ、この不安定な世界をどうにかして人が支えているというものを表したかったのではないか．何を表しているのか、自然に考えていた。とても興味深かった。
やはり、芸術というのはよくわからない。しかし、分からないだからこそ、この作品が何を表しているのか、作者は何を伝えたかったのか考えるのが鑑賞のだいごみなのだろう。そう考えると、とても面白かった！

井上夕楓

一番好きな作品 → 千秋『感佩』

「感佩」が心に残りました。部屋のいっかくのてまえに色とりどりのぼんぼりがあり、その奥にいろんな顔をした写真があり、独特な雰囲気をだしている様に思えた。“感佩” の意味が分からず調べたところ、心にふかく感謝するという意味で鎮魂とはたましいなどをおさめること。
鎮魂をぼんぼりで表し写真の人を感謝しておさめている様子が分かった。この表現の仕方が私はすごいなと思いました。ぼんぼりの色が違うということは、亡くなった人の個性を表しているのかなと思いました。



recollections

亀山トリエンナーレ 2017 体験記

国際交流基金アジアセンター　**山野夏紀**

亀山トリエンナーレに初めて伺ったのは 2014 年。　帰省中に公共施設で偶然チラシを手にしたことがきっかけだった。身近な町で開催されている「トリエンナーレ」をぜひ見ておかなくては！と急いで出かけ、旧街道の面影を残す町並みや歴史的建築に現代美術がちりばめられた展示を観て、とてもわくわくしたことを覚えている。

それから 3 年、今回の亀山トリエンナーレ 2017 の開催を知った媒体は、なんとファッション誌「VOGUE JAPON」のアート特集。知らない間に変化を遂げて、「おしゃれ」なイベントになっているの？と、どきどきしながら、訪ねてみた。

訪ねたのが週末ということもあって、会場は、アートファン、イベントを楽しみにおでかけの方、“アートがあるフォトジェニックな景色” をお目当てにカメラを携えて訪れている方などたくさんの方々でにぎわっていて、まずその盛り上がりに嬉しくなった。
次に、感じたのは、作品数も見応えもパワーアップしていたこと。そして不思議なバランス。
それぞれの展示会場に、現代美術ならではの新しい視点や表現方法など、作品が発している挑戦的なムードが在ったのと同時に、芸術祭全体には人の気配やあたたかみが絶妙なバランスで漂っていた。
この挑戦的な雰囲気とあたたかみの不思議なバランスは、“歴史的な建物や人の暮らしが見える場所に現代美術がある”、という展示の構成によるものだけでなく、街中の往来のいたるところで来場者と町の人との立ち話がはじまるなど、様々なところで感じられた。
私がお伺いした週末にも、ボランティアスタッフの方だけでなく、展示スペースとなっている建物のオーナーの方や地元の方々が会場にいらっしゃって、町や建物のこと、作品の感想など、いろいろな話を聞かせてくださった。

この状況がどうやって生まれているのか気になって、事務局・出展作家の方々にいろいろとお話をお聞きしてみたところ、この芸術祭では、運営を地元の方々とアーティストが中心となって構成された事務局で行っていて、外に向かって「町とアート」を見せていくだけでなく、町の人々と現代美術との間の架け橋になることも目指しているという。
顔の見える地元の方々とアーティストが、芸術祭を動かす主体となっていること、そして、現代美術を敷居の高いものではなく日常の空間に取り込んでいることで、直接運営にはかかわっていない町の人も自分の生活の延長線上にこのトリエンナーレをとらえているのかもしれない。
トリエンナーレと町のゆるやかな一体感が、大規模なプロジェクトともお祭りとも違う、現代美術とともに町や人の暮らしが垣間見えるような、この芸術祭の魅力を作っているように思われる。

現代美術では「ソーシャリーエンゲージドアート＝社会に深く関わる芸術活動」と呼ばれる潮流があるが、亀山トリエンナーレでは芸術祭全体で「ソーシャルエンゲージメント」が実現されているようにみえる。

「挑戦」と「ほっこり」が絶妙なバランスが魅力の亀山トリエンナーレ、2020 はどんな姿をみせてくれるのか、とっても楽しみである。

亀山トリエンナーレ 2017 へ寄せて

イタリアンレストラン　トラットリア　イルテルノ
店主　佐藤明子

亀山トリエンナーレというイベント、今回たくさんのご縁をいただき様々な形で関わらせていただき、私にとっては普段住む亀山を再発見する貴重な経験となりました。

普段あまりアートというものに触れる機会がない私には「現代アートの祭典」という言葉はどこか敷居が高いものでした。そんな中、「亀山トリエンナーレとコラボしたコースをイルテルノで出してくれませんか？」というお話をいただきました。アートを楽しみに亀山にいらっしゃる方々に料理も楽しんでもらいたい、私たちにとっても新しい挑戦となったこの試み。開催期間中、トリエンナーレに訪れたたくさんの方にご来店いただきました。その方々からお聞きするトリエンナーレや亀山に対する感想、どれもが私にとって嬉しいものばかりで、この料理を通して私が一番たくさんの感動と出会いをいただくことができました。

実際に足を運んでみた亀山トリエンナーレ。そこは普段見ている亀山の街なのに日常とは違う、でもやっぱり亀山で、そんな亀山がより一層好きになる素晴らしい空間でした。日常の生活では車で移動することばかりでただ通り過ぎる道、いつもはシャッターが下りているお店、ひとつひとつが異空間となっていることに感動し、何度も亀山の街を歩きたくなる、そんな場所になっていました。

たくさんの感動を与えてくれた亀山トリエンナーレ。その中でも特に思い出深いのが、私の小学 2 年の娘が体験させていただいたワークショップとパレードでした。学校にアーティストの方が 3 度も来てくださり、実際に体を使った表現を一緒に体験。さらにそこで教えていただいたダンスを歩行者天国でパレードして披露する。こんな貴重な経験をできたのは市内 2 つの小学校の限られたクラスだけで、そこにいることができた娘は本当に幸運だったと思います。
幼い頃に自分の街で感じたさまざまな形のアート、これはどんな勉強にも勝る経験として今後の彼女の心に刻まれたことをそばで見ていて感じると、そんな経験をさせてもらえた娘がうらやましくもありました。私も子供の頃にこんな経験をしていたらアートとの関わり方が違っていたかな、そう思いつつも、この歳にしてアートの楽しみを与えてくれた亀山トリエンナーレに感謝の気持ちでいっぱいです。
3 年後、またどんな形で亀山とアートが交わるか、今からとても楽しみです。

特別メニューを提供
鈴鹿・亀山版
亀山トリエンナーレ期間中
食で盛り上げ

トリエンナーレに思う

遍照寺　村林葉子

当寺では、金毘羅堂と本堂に展示していただきました。

遍照寺の前の道は東海道です。万（よろず）町と言われていました。金毘羅堂は霊験あらたかなお堂ですので、観賞していただく前には皆さんにお浄めの意味で塗香をしていただきました。
この「塗香」というお浄めの仕方を、皆さんがその意味をきちんと理解してくださたこと、このような仏教的体験を通して「神聖な気持ちになった」と言っていただいたことが大変嬉しかったです。

金毘羅堂に展示された木全靖陸さんは、龍の絵や陶板画で名前が知られた方です。
私はこの方をテレビで取り上げたドキュメンタリーで知っていました。龍を書かれるということは知っていましたが、今回は初の半立体インスタレーションです。廃材を龍のかたちにして命を与えた作品だそうです。龍なので、金毘羅堂を守っていただけると思っていました。龍は、金毘羅堂の中で生き生きと仏法を守る聖獣として甦っていました。私はこの龍に出雲のヤマタノオロチの神楽を想像しました。
展示を鑑賞した方から、鱗が亀甲になっているという事も聞き、木全さんのここに展示するにあたって、「亀山だから鱗を亀甲にした」とか、思いと工夫と意気込みと苦悩を感じ取ることもできました。

本堂には、北村拓之さんの作品がありました。サイドの大きな壁面いっぱいに、ビニールシートをキャンバスに見立てて、木炭で書いた絵がありました。片側には、文明が滅んであとでも修羅道に落ちた人間たちの戦争の絵『少し先の話』ともう片側には、集合写真に閃光がきて、なんでもない普通の人々が「光」によってかき消される瞬間の絵『閃光』です。タッチも「少し前の話」は力強く、「閃光」は今にも消え入りそうなはかなげなタッチです。阿弥陀如来が鎮座する本堂で「第三次世界大戦がどのように行われるかは私にはわからない。だが、第四次世界大戦が起こるとすれば、その時に人類が用いる武器は石とこん棒だろう」というアンシュタインの言葉が北村さんの脳裏に浮かんだということでした。

このアインシュタインの言葉を、今の不穏な北朝鮮の問題がメディア等で注目されていたこともあってか、北村さんのコンセプトをお伝えすると若い人達が「そういうことね」とすぐに理解されたことに私は驚きました。土嚢には亡き者たちの顔が書かれていますが、下見に来られた時に「このようなものも置かせていただいてもいいですか」と見せていただいた顔が、興福寺の法相教学を広めた無著（むちゃく）と世親（せしん）兄弟の顔を思い出し、本堂という空間に北村さんの絵が来ても大丈夫だろうと思いました。北村さんの「人類の最悪の結末から現在を守りたい」という思いは 鎌倉時代の阿弥陀様、勢至様、観音様に、平安時代のお地蔵様に守られている本堂に、馴染み伝わっていました。

若者たちは「こんな未来になることを避けたい」と思い、赤ちゃんを抱いたお母さんや小さな子をつれたお母さんは「こんな時代がきたらどうしよう」と思う不安をと口々に言われ、中でも赤ちゃんを抱いたお母さんの「もし子どもに出征届がきたら、うちの子はもういませんといって子どもは守ります」といわれました。
私も孫が二人男の子なので、よく気持ちは分りました。

また、小さな子たちは「こわい、こわい」といっていましたが、そんな中のお母さんが「こんなこわいことが起こらないようにお兄ちゃんは書いたんだと思うよ」といわれていました。幼い女の子は阿弥陀さんに小さな手を合わせて「みんなが平和に暮らせますように」「みんなが笑ってくらせますように」といいました。
年をとった方たちは、自分が体験した戦争を思い、若い人たちは、未来に起こるかもしれないことに脅威を思い、私たち世代が息子や孫がこんな世界に生きることがないようにと平和を思っていました。
どちら作品も、金毘羅堂と本堂と言う仏教の道場で、見学の方々の思いが化学反応を起こしていて、素晴らしい展示だと思いました。

期間中に２０００人もの方が参詣いただきました。浜松、名古屋、東京など遠方の方々や、鈴鹿や津や四日市の近隣市の方も、「亀山は城下町で、歩くと素晴らしい町だと改めて思った」といわれていました。
これだけのイベントを無料で行い、街を美術館にというコンセプトが素晴らしいと多くの方が感想を言われました。また、若手作家の発表の場所になっている点にも、皆さん感心してみえました。
それと同時にここまで準備された、実行委員会の方々のご苦労を思いました。
本当にお疲れ様でした。
　今まで育った亀山の街が、魔法の粉を掛けられたようにきらきらと輝いていた。そんな三週間だったのではないかと思います。関係者の方々におかれましては、本当にお疲れ様でした。そして素晴らしい時間をありがとうございました。

亀山トリエンナーレ 2017 感想

山形屋酒店　伊藤浩之

僕の店舗では津市の藤田 昌久さんに作品を展示してもらいました。
ショーウィンドーには市役所とナガイ種苗店と山形屋酒店の木版画の原版と完成版の 2 種類が飾ってあり、近くでみるのと遠くでみるので見え方が違うのにビックリしました。
店内にも最初は、3 点展示作品がありましたが、日に日に作品が増えていき最後は 6 点になりました。

入り口の自動ドアに POP で「店内にも作品あります」と貼り紙をすることで、いつもより、多くのお客様にご来店していただくことができて店も活気付いているような雰囲気でした。

最終日、藤田さんにうちの店の木版画をいただきました。とても、嬉しく思いました。
トリエンナーレが終わってからも店に飾ってあります。
次回も是非、参加したいです。

ボランティアとして参加させていただいて

ボランティア　國分千紘

舘家、加藤家と午後の部のボランティアをさせて頂きました。
どちらの建物も、歴史が深く素敵でした。
加藤家では、お客様のお一人に末裔の女性がいらっしゃり、子供の頃加藤家に住んでいた時のお話をお伺いできました。
舘家では亀山が初めてのカップルにトリエンナーレの廻り方のススメを聞かれ、自分なりに一生懸命説明させていただきました。その日一日トリエンナーレを楽しんで行かれたようで、閉館前にお礼を言いにお二人でまた立ち寄って下さいました。「あなたに出会えたおかげで楽しい 1 日を過ごせました、ありがとうございました。」というお言葉をいただきました。喜んで頂けて本当に嬉しかったです！

このような、亀山トリエンナーレを通じて、市外、県外の人との繋がりを経験出来る事は、なかなかないチャンスなのではと思います。その機会に参加させて頂き、ありがとうございました！

亀山トリエンナーレ　僕が見たもの

鈴鹿野郎舞一座　大道芸人　加藤みきお

３年前にトリエンナーレを観ました。演劇有り、映像有でとても楽しかったのを覚えております。
３年ぶりのトリエンナーレは僕にとってワクワクな３週間でした。私は大道芸人を職業にしてる手前土日はほぼ見れないのですが、平日も観れるのが嬉しいですね。
僕が行った初日は映像中心に作品を見たかったので、大岡英介さんの『ＹＯＭＥＩＲＩ』、中尾広道さんの『風船』。この『風船』は、音楽も素晴らしかった。
舘家の武井琴さんのアニメーション映像作品、コマ撮りで亀山関宿を走りまわる少女。作品を見て、二十三年前に津市一身田で撮った短編映画『少年王者館のトワイライツ』を思い出す。コマ撮り早回しで撮って町を走り出す武井琴さんが、当時の主演の女の子と被って見えたのだ。記憶が蘇る！月の庭のマサルさんも私も出ている映画なのだ。懐かしさがこみあがる。
青木倉庫の濱口新平君の妖精も面白い。階段には、妖精が一杯飾られてるんだ。新平君に聞いてみると、妖精に名前はもちろん、出身地や年齢・職業・性格もバラバラだ。人形にも一つ一つ、大切な魂があるってのを教えられた。
トリエンナーレの作品は小さいものから大きいもの、ネイルにゲルニカを表現したモノや、家全体をアートしている作品、森敏子さんだ。この企画の事務局であります。もう知り合って二十三年です。
身近な所に芸術がわかる方が居て、嬉しいですよね！一日じゃ見れない程芸術テンコ盛りの亀山トリエンナーレです。
大理石を削って作品を作る森本さん。ふれあい広場に行くたびにどこまで彫れたのかなって見るのもまた楽しみでした。日毎に作品が変わっていくのも面白く、内藤君の消臭ビーズの作品も玉が小さく変化していき毎回違う物体に見えてしまうってのも面白いですね。
目で見る芸術、音で感じる芸術　月の庭にあった音が数秒経ってから戻ってくる。これも大変面白かった。人の会話、手をたたく音、遅れて音が戻ってくるのです。音の奥の深さを感じる。
旧東海道を歩くと、元ユリ美容室のツートン色の室内。これも幻想的で良かったですね。
トリエンナーレの最終日は雨でした。大道芸仕事が中止になったのだ。普段ならガックリするのだが、今日も亀山に行けるぞ！喜んだ。なぜなら生パフォーマンスの三木みどりさんの四時間のパフォーマンスが観たかったのだ。男心に彼女は全裸で入ってるのかな？　そんな想像もまたいいものです。

トリエンナーレが終わった後も、ついつい亀山が恋しくなり一人亀山散策する私でした。素晴らしい作品を有難う！
作家の皆さんまた会う日まで。
また亀山で会いましょう。

亀山トリエンナーレ 2017

フードコーディネーター・ボランティア　岡田 桂織

亀山に心地いい風が流れていた 3 週間でしたね。
人通りの少ない町並みを毎日人がぞくぞくと歩いているなんて！
町が目覚めてイキイキとしているではありませんか！
もうあの風景を見られただけでも私は嬉しかったです。

今回は『美味しいものマルシェ』の担当をさせていただき、そちらもいろんな方に
関わって頂けたので、調整や段取りなど私にとっても（美味しい）いい経験となりました。
出店の方々も津、四日市、松坂、伊賀、いなべ、宇陀…いろんなところからの出店者でした。

期間中に出店いただいた方々
9/24『あいのや』、『もぐらや』、『カリー河』
9/25『小さなビストロ Kameyama Kitchen〜カメキチ』
9/30『もぐらや』、『カルパキッチン』
10/1『あいのや』、『風車かじまや』
10/2『小さなビストロ Kameyama Kitchen〜カメキチ』
10/7『カルパキッチン』
10/8『もぐらや』、『地球食』、『Neo ベジタリアン® みえチーム』、『エジソン休憩所』
10/9『桂樹庵』
10/10『小さなビストロ Kameyama Kitchen〜カメキチ』
10/14『望仙荘』、『カルパキッチン』
10/15『カリー河』、『CAFE NeKKO』

出店の皆さんも会場を歩いて回られ、口々に『亀山ってすごいね〜！』と言われてました。
私も期間中に友人知人たちを何度かガイドして歩いたのですが、今回のトリエンナーレは前回
よりも規模も内容も良く、楽しめました。友人知人たちも私の独断と偏見に満ちたガイドにも
関わらずみな楽しんで歩いて回ってくれました。

遠方のお客様が多かったのも驚きでしたが、三重県内のお客様も沢山来場頂きました。
おそらくこのトリエンナーレがなかったら一生亀山を歩くことはなかったと思われる方々なの
ではないかしら…
今回これらの方々が口々に『亀山ってええな〜、すごいな〜』と言ってくださってました。
トリエンナーレが直接町の活性化や発展に結びつくかどうかは分かりませんが、こういう外から
の声が亀山市民のモチベーションを上げたり、誇りを取り戻してくれたりして、それが結局、町
を活性化したり発展させていく事に結びついたりになっていくんやないかなと私は思います。
期間中に息子の同級生の青年が訪ねて来てくれたのですが、彼は名古屋の美大を出て今は名古屋
に共同アトリエを借りて作品を制作してるとの事でした、今回は次回のトリエンナーレに出品す
るための下見に来たとのことでした。
彼にとって故郷でまさかこんな事が興ってるというのは想像だにしてなかったことでしょう。
3 年後に彼はどんな作品を引っさげて故郷に帰ってくるのでしょうか。
楽しみで仕方がないですね。

オープニングパーティーでは、盛り付けを担当させていただいきました。
少しでもパーティーを華やかにできたらということで色んな葉っぱを敷き詰めたテーブルに所狭
しと美味しいものを盛り付けました。
葉っぱも実行委員会の皆さんが協力してくださって、美しい葉を準備頂けたのでとてもスムーズ
に楽しく盛り付けられました。
各地からいらっしゃった作家の皆さんに少しでも喜んでいただけたなら幸いです。
自分の得意分野で参加させて頂き、とても有難く貴重な時間をもらえました。
私だけでなく、ひとりひとりが自分のできることで貢献するそんな姿を沢山見られた素敵な催し
だったと思います。

現代アートの威力

ボランティア　林　千代

「亀山トリエンナーレ２０１７」が閉幕してしまっているにも関わらず、私にはまだ作品がそこここで息づいているかのような気配を感じています。それは現代アートの持つパワーでしょうか。
それぞれの会場での作品群がもたらした存在感であったり、意外性であったり、発散する刺激であるのか。古き歴史を持つ加藤家屋敷跡、舘家、西町・万町から東町への東海道沿いのお寺さんや元商店、崖の上の白い街・東町商店街での作品の数々。ひとつつひとつを目にも心にも焼き付ける思いで楽しませて頂きました。
これらのロケーションをそれぞれの展示会場と定め作家の皆様が独自の世界観、芸術を発信されました。市内はもとより全国各地から鑑賞に訪れて下さいました。幼児も学童も中高生も大人の方々もアートの世界をどれほど楽しまれた事でしょう。
亀山に生まれ育ち、くらしている自称「かめやまびと」の私は、これまで以上に亀山が大切になり、好きになり自慢できるところとなりました。
既に「素」に戻っている当地ですがトリエンナーレ事業の威力は奥深く蓄積され、今後何らかの進化・発展につながるのではと願っています。
最後になりましたが関係各位すべての皆様に感謝申し上げます。

亀山トリエンナーレ２０１７、本当にお疲れ様でした！

実行委員　今岡　翔平

今回は実行委員として様々な動きをさせていただき、たくさんの作家さんと距離が近く、仲良くなれた充実の会期でした。
自分の会社の役員やかめやま若者未来会議のメンバーと万善薬局の片づけをしたり、亀山ＪＣのメンバーと森本紗月さんの彫刻作品をユニック車で設置、撤去したり、３週間滞在している作家さんに知る人ぞ知るラーメン屋さんを紹介したり、箕浦さんといろんな学校で準備したり…充実して過ごすことができました。

作家さんの顔と名前が一致して、どこに誰のどんな作品が展示されているのかインプットされていたのには自分でもびっくりしました。

これからも亀山トリエンナーレに積極的に関わっていきます！どうぞよろしくお願いします。

乾杯は亀山茶で！

実行委員　福沢美由紀

オープニングの乾杯でお出しした水出し冷茶があまりにも美味しかったので、つくり方を教わり、トリエンナーレの期間中、毎日冷茶でおもてなしをすることに。

亀山市には亀山茶を飲んでいただくためのテーブル『Tea Bar』がある。

トリエンナーレにいらしたお客様に、『こんにちは。亀山はお茶どころなんですよ。』とまず一服。

商店街を鑑賞して歩き疲れた方に『暑かったでしょう。』と一服。
作家について、作品についてのお話が聴けるのも嬉しい。

市民活動グループの方が活動を終えて二階から降りて来られる。『あら～お茶があるの～？』と一服。輪になって楽しくおしゃべり。

懐かしい知人と再会、『よくきてくださったわね。お茶をどうぞ。』と一服。話に花が咲く。
時間やタイミングを見てお茶を淹れてくれる人がだんだん増える。お茶菓子を差し入れてくださる方も。少し寒い日は亀山茶をきゅうすでゆっくり淹れる。亀山紅茶をガラスのティーポットで淹れる。美味しく淹れられたときは嬉しくてお茶を淹れるのが大好きになった。

伊達製茶さん、市川大楽園さん、日本茶インストラクターのみなさん、文化年のお茶部会の方々、ボランティアのみなさん、市の職員さん、みらいの職員さん、その他いろんな人が繋がっておもてなしをすることができた。

お茶が喉を潤すだけでなく、心を潤し、人と人をつなぐ様子をつぶさに見ることができたトリエンナーレだった。
ありがとうございました。

加藤家屋敷の展示

出展作家　木原圭

亀山トリエンナーレ 2017 で、加藤家屋敷のキュレーションを担当しました Cake Hara と申します。
キュレーションという言葉は聞き慣れないものだと思いますが、美術におけるキュレーションとは、一つの方針、方向性を元にアーチストとその作品を選び、展覧会を作り上げる仕事の事を言います。加藤家屋敷では、「現代社会との繋がり」「多様性」「加藤家屋敷という場を活かす事」をポイントに展示の構想を考えていきました。
今回は海外からの参加者二名について作品についてや展示までの経過をご紹介いたします。

加藤家屋敷玄関にアクリル板を削った大きな作品を展示した Norton William（USA）は幼少期に父親の仕事で日本に住んだ事がありました。その時に出会った小泉八雲原作の「猫を描いた少年」という絵本がとても印象深かったそうです。その話の中での少年は沢山猫の絵を描き、その描いた猫の絵 (空想) が、あるお寺に住んでいた魔物 (現実) を退治するというものだったのですが、Norton もその少年のように絵が描きたいと思ったそうです。幼少期の Norton にすれば猫を描いたその少年は魔物を退治したヒーローであり、子どもながらに芸術の力をその時に感じたといいます。

そんな子どもの頃に過ごした日本で出会った本に人生を導かれ、まだ今なお日本の文化に魅了され続け、その主人公のように絵を描く事で現実世界に何か影響を及ぼしたいと Norton は考えています。今回幼少期に夢見たような場所で、作家としての原点に戻ってその当時の思いを込めた作品を展示しました。

加藤家屋敷裏の庭に大小 8 つの石を展示した Hector Falcon(MEXICO)。彼は日本の武士道や『侘び寂び』『粋』といった概念に大変関心を持っており、中でも九鬼周造の『「いき」の構造』（岩波書店）に大変感銘を受けたそうです。メキシコにはないその概念の特異性に地球の裏側から色々な想像を膨らませたそうです。そんな日本の概念についての本を沢山読みあさりました。そんなある日の事、メキシコで展覧会オープニングの時に来場者の一人がワインを床にこぼしてしまったところを偶然近くで Falcon が目撃しました。冷たい床のコンクリートにこぼれたワインがゆっくりとしみ込んでいく時、ふとある光景と被って見えたそうです。岩に朝露がしみ込んでいく様、蝉の声が岩にしみ入るという表現、何かと何かがぶつかるのでなく、同化していく様、融合していく様はまさに日本だと感じたそうです。ある物質に何か異質のものがしみ込んでいく様を表現できないかと、そんな体験から生まれた作品でした。

今回そんな彼の作品である石を運ぶことは大変困難を極めました。空輸するには重さがネックとなり非常に高額な輸送費が見積もりされました。知人にいた貿易業者の船便も税関の手続き等で困難を極めました。開催一年前から日本とメキシコであれこれと幾つかの方法を探りましたが時間だけが過ぎて、なかなか良い輸送手段が見つかりませんでした。

そんな中メキシコ政府の外務省に掛け合ったところ、一定の条件で作品の一部なら外務省の便で送る事ができるとの許可を得る事ができたので、早速その手続きの為の資料作成を日本とメキシコの双方で急ピッチで行い、国際電話で何度もやり取りをし、今回持ち込んだ８つの石の中の重量のある２点を東京の大使館まで送って頂ける事となりました。その時既に展覧会開始まで残り一ヶ月というギリギリのタイミングでの決定でした。

展覧会開始まであと一週間のところで Norton が大阪に到着、約 15 年ぶりの再会でその両手に持つスーツケースには沢山の作品のパーツがぎっしりとつまり、その重みに亀山での展示への思いを感じました。到着した次の朝に早速現地へ赴くと、まずはその加藤家屋敷の佇まいに言葉を失い、泣きそうなくらいにすばらしい建物だという表現を使うほどその建物に感動をしていました。加藤家屋敷の歴史的な話をし、1 週間という余裕をもってその場の静寂を感じながら Norton の展示は始まりました。

常に自らの愛読書をそばに置き、焦る事なくゆっくりとした時間と共に展示を進めた彼でしたが、加藤家屋敷を自分の目で見てから最終の形態を考えようと多くの未加工素材を日本に持ち込んでおり、加工に関してアメリカとは違う環境に少し苦労する事もありました。それでもアクリル板を湾曲させるのに月の庭さんの援助を得たり、漢字のタイトルを書くのにボランティアの方の協力を得たり、さすがに亀山の地域ネットワークと Norton の人柄と少しのジョークで多くの困難を乗り越えていきました。

そんなホッとしていたのもつかの間、実は Falcon の作品をメキシコ政府が輸送してくれるのはメキシコから東京の大使館までで、そこから亀山まで送る手段がない事が判明しました。大手宅急便に相談すると通常の宅配便の重量規格を大きくオーバーする為、またもや 10 万円を超える高額の輸送費がかかるという見積もりです。何社も見積もりを取るも、ため息の出る結果ばかりでした。そんな中ようやく一社だけ納得できる見積もりをいただく事ができ、その場で東京の大使館へトラックの手配をし、大使館へも引き渡しのお願いをしました。メキシコから東京、そして亀山までのルートをようやく確保できたのその時、展覧会開始まであと 5 日という本当に絶妙のタイミングでした。

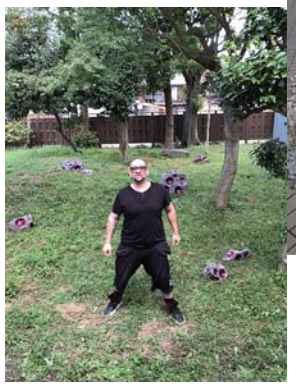
幾つもの針の穴に一気に糸を通すような、そんな作業の連続でしたが色々な幸運も重なり、なんとか輸送の目処がつき展示作業にこぎ着くことができました。展覧会開始まであと 4 日。そんな時に起こったのがマグニチュード 7.1 のメキシコ大地震で、それは Falcon がメキシコを出て日本に到着したその日の深夜のことでした。

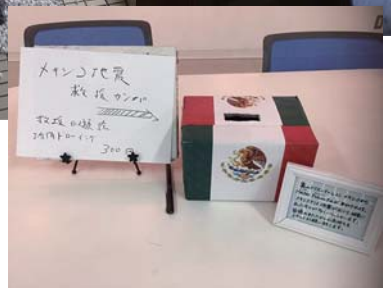
昨日までいた場所が、馴染み建物が、見慣れた光景が一瞬にして変化していくのを携帯の小さな画面から Falcon は見たそうです。現代は多くの情報が瞬時に行き交いますが、瞬時に地球の裏側にまで行く事はできません。複雑な感情を抱えたまま日本での滞在が始まりました。

この時実行委員の中でも地震が話題となり、亀山の為にメキシコからはるばるやって来てくれているので、困っているメキシコへの恩返しができないかと言う事になりました。私自身もメキシコには住んだ事があり、そんな懐かしい町が苦しんでいる様子が、私自身が経験した阪神大震災の時の瓦礫の中での炊き出しと重なり、涙が出る思いで何とか力になりたいと思いました。安否確認のメールが SNS 上で行き交う中の事です。皆で募金を募る事になりました。
また、地元の出品作家の 1 人が来場者の似顔絵を描き、その利益を全て寄付して下さいました。

搬入日当日、その募金箱を見た Falcon が動画でその様子を自らの Facebook で紹介すると、在メキシコ日本大使館が取り上げ、大きな反響を得る事となりました。現在その動画再生回数が 26 万回、シェア件数が約 1 万件、コメント数 700 という膨大な数となり、そのコメントをみると感謝してもしきれないとか、日本がもっと好きになった等の沢山の温かい言葉が添えられ、日本とメキシコとを繋ぐ心の架け橋となりました。
そんな激動の中、今回の加藤家屋敷の庭で Falcon の展示が完成したのが展覧会開始の一日前でした。その頃には Norton の作品展示も完了し、ようやく加藤家屋敷に来場者を迎える準備が整いつつありました。

現在 Falcon の作品の一部を亀山文化会館二階に展示しています。





技術屋としてかかわった亀山トリエンナーレ

実行委員　**伊藤幸一**

亀山トリエンナーレとのかかわりはアート亀山も含めれば 8 年を超える。

現職時代の経験を生かして主に電気系の技術方面からお手伝いをしてきたけど今回は特に映像や音を使った作品が目立った。
機材の依頼も多く、ねこの館から無料提供したノートパソコンは 8 台、プロジェクター、モニターは 5 台にもなった。

今回は期間が 3 週間と長く、これだけパソコンが多いと毎日の立ち上げとシャットダウンの負担がたいへんである。
そこでパソコンの内蔵タイマーでの自動起動、自動終了を標準としたが文化財である舘家、加藤家では大きなハードルがあった。火災事故防止のため夜間は完全に停電状態となる。これは致しかたない。そこで毎朝の複電時に自動起動がかけられないか検討し幸い今回はビジネス用パソコン特有の機能によりこの難問もクリヤーできた。プロジェクターも一部を除き自動起動、自動停止の機能を活かせた。

作家からの前例のない要望もあった。普通なら数十万円の高機能パソコンと特殊なソフトで対応できる複数モニターへの複数動画の同期表示である。
今年初めから試行錯誤を繰り返しほとんど投資なしで実現できる方法を考え付いた。

技術屋として不可能を可能にするチャレンジ精神に目覚め自分自身も楽しんだ。もう古希になる歳なので先のことはわからない。今回が最後になるかもと、全力を出し切った至福の数ヶ月であった。

recollections〜作家たちのトリエンナーレ〜

※作家名前の番号は展示マップとリンクしてます。

祖母が亀山生まれだったらしく、今回の亀山トリエンナーレの参加を両親が喜んでおりました！
（6. 笠井祐輔）

亀山生まれ、亀山育ちのわたし。
偶然にも展示させていただいた高村書店さんは同級生のご実家でした。
ほぼ毎日高村書店さんのベンチで高村のお父さんやお母さんと話しながら制作をする日々は今思い返しても心温まる、貴重な時間でした。トリエンナーレが終わってからも商店街付近に行く時は必ず立ち寄る、自分の居場所のような存在です。本当にありがとうございました。
また、地元民ならではですが、毎日が再会の連続でした。
１０年振りに会う恩師や友人達。また、トリエンナーレを通して慣れ親しんだ亀山の風景がより親密な、それでいて刺激的なものに変わっていった事は私の中で大きな変化でした。改めて亀山が好きだなぁ、と思う瞬間でした。
（18. 松岡歩未）

初めて連れて行った時、作品を見てても子供たちは「何これ？絵具塗っただけやん w」とか言っていてろくに見てなかったが、色んな作品を見て回っているうちにだんだんじっくり見るようになり、スマホで写真まで撮りだすようになった。普段 Youtube や TV で創った人のイメージを叩きつけられているせいで、自分から迎えに行くことが無いんだと思うが、このような場所で感性をちょっと刺激してあげると自分のイメージを作って友達と話しているのを見て、子供たちの柔軟性に改めて感心しました。
（33.Hiroshi Mehata）

いろいろ御世話になりました。アート亀山から４回目の展示でスタッフの方々や商店街の方たちとも顔見知りで、「あれ〜新平ちゃん今年も出しとんの。」と声をかけていただて嬉しかったです。
妖精の話を熱心に聞いて下さったり、ファンになって下さって会期中遠くから何度も来てくれた方もみえました。
他の作家さんたちとも仲良くなって、いっしょにご飯も食べにいったりもしていままでで一番楽しく過ごせました。打ち上げでも、作家さん以外の人とも話ができてよかったです。
事務局長森さんの意見を参考にし、また階段を妖精の雛壇にというステキなアドバイスをして下さった井上さん、コラボさせてもらったうらんさん、他スタッフの方々など、ほんとにいろいろな方のお陰で無事３週間を終えることができました。
ありがとうございました。
（21. 濱口新平）

井上さんのアドバイスがとても参考になりました。運営スタッフの皆さんも作家の意思を尊重してくれて、作家同士の交流もでき、色々な価値観と美しさが亀山の建物に生かされて街とアーティストの活気がどんどん上がって行く様子がワクワクしました。
（20.Maigorock）

縁側で制作準備をしていると道行く人が不思議そうに見て、私に気付くと挨拶してくれます。通りがかりの方やご近所の方とお話ししたり、近くで展示をしてる作家さんらと話したり、そのたびに、ほっと温かな気持ちになり、この場所やここで作る作品が益々愛着と思い入れのあるものとなりました。
（29. 天野入華）

私は埼玉からの展示だったため下見、展示、撤去と３度しか亀山に訪れることが出来なかったのですが、山田靴店店主様がとても良くして下さりました。
撤去に訪れた際はどれだけたくさんの人が訪れていたのか、どれだけ忙しかったか、事細かにどういう人が何と言っていたか、これは絶対に伝えるべき感想などなど時間の許す限り語って下さり、展示させて頂いた私としてはそれはそれは至福の時で、瞬間的に様々な光景が店主様と共に目に浮かぶようでした。展示し撤去させて頂いた私とは別に、店主様は何かを「体験」され楽しんで頂けたように思えて、とてもうれしかったです。
（26. 伊賀上良太）

今回のトリエンナーレでは、お花屋さんのさかきやさんで展示をさせて頂きました。お店の方々にいつも家族のように温かく迎え入れて頂きました。お弁当の差し入れやお茶菓子をご馳走になりながら、お花のお話や作家としての私の取り組みをお話しさせて頂くこともあり、このような心のやり取りがとても心地よいトリエンナーレ期間であったと思います。
最終日には花束も頂き、これからも繋がりが絶える事はないのだろうなと思う温かい出会いでした。
（7. KaEna）

・編みものが趣味の大家のおばあちゃんと仲良くなって、自作のお洋服を２着いただきました。かわいらしい編みぐるみも！ほかにも、さつまいも入りおにぎりや筑前煮などのおいし〜〜ごはんもごちそうになりました。お別れは寂しかったですが、ほっかほか笑顔で帰ることができました！ありがとうございます！

・ほぼ毎日白鳥の湯に通っていました。いつも顔を合わせる人たちと挨拶するようになったり、湯に浸かる以外にもたのしみができました。

・商店街を通る人たち。はじめは会釈するくらいだった人とだんだん声を出して挨拶するようになり、さいごにはお話するようになりました。非日常がふっと日常になった！と感じる瞬間がいくつかあり、貴重な体験でした。
（11. クボタマミ）

＊私の作品を見る人のほとんどが、そもそも写真だと思っていなかったり、写真だと気が付いても画像処理を行っていると思っていたり。
写真作家として、写真は一発勝負で撮るものと当たり前に思っていたが、見る側はそうでもないことに気がつき時代の流れを感じた。
＊舘家の雰囲気と作品がぴったりと合って、とても良い展示になりました。舘家で展示出来てよかったです。（35.KAO’RU 柴原薫）

★８日 13:00 の回のパフォーマンスをご覧いただいた地元の男性の方に、出演者がたまたまほかの展示会場でお会いして、少しお話させていただきました。そのあと、16:00 のパフォーマンス終演後に会場に来られて、「若い頃はこういうのよくわかんないって思ってたけど、じわじわきたよ。パフォーマンスって面白いって思ったよ」とおっしゃって、梨を４つくださいました。

★ご夫婦でご鑑賞いただいていたお客様。奥様が上演中に水彩セットを取り出されて、パフォーマンスを見ながらすらすらハガキサイズのキャンパスに俳優の姿を描いてくださいました。終演後もしばらく会場にとどまって、そこからの眺望を楽しんでいかれました。

★京都で和田の大学の同期だった友人が見に来てくれました。亀山が地元だったようで、回覧板でまわってきたフライヤーの中に和田の名前を見つけてくれたとのこと。作品中に、亀山の地理や熊野のあたりに言及するパートがあり、彼の祖母が熊野に住んでいることもあって、自分にぴったりの作品だと言って楽しんでくれました。（17. 守田友樹と和田ながら）

期間中、毎日展示場所で制作したことで来場者から、素材や作品についての率直な反応をみることができました。子どもたちが大理石という素材にとても興味を持ってくれて、その質感やノミ跡に触れて自分も彫りたい！という姿から私が初めて大理石を彫ることになった時を思い出しました。

どれくらい進んだ？と何度も立ち寄ってくれる方もいておにぎりやお菓子や果物を差し入れて下さいました。最終的に自分が予定していた完成段階まで持っていけなかったので申し訳なかったです。

通りを挟んで向こう側ではお寺の門の修繕を職人さんがしていました。広場にトイレがあるので休憩の度に私にもお茶を差し入れてくれました。職人から見れば私は遊んでいるように見えたかもしれないけどいつも声を掛けてくれて、修復中の現場も見せてもらいました。普段は見えない瓦屋根の下は 200 年前に組まれた木材が残っています。とても壮大な造りを間近で見て驚きました。

アーケードには若い人や外から来た人がたくさん歩いていたけど商店街自体に活気が出たわけではなく温度差があったように思いました。もっと分かりやすく彩られる作品があると良かったかなと思います。（16. 森本紗月）

アート亀山～亀山トリエンナーレ２０１７まで１０年という年月の中で出来上がってきたことは何だろうと考えると。亀山の商店街をはじめ、市役所の職員の方や今回のように展示場所として提供していたいた方々の熱い思いと作家一人一人にの情熱が生み出していく、レトロで新鮮で新しい作品と空間の面白さだと思います。そして何よりその展示場所それぞれの空間でドラマを生み出すことです。人間の交流と関係の織り成すハーモニーが絶妙に楽しいです。
特に旧万善薬局さんに関わらせていただきとても感謝しています。ここの会場で展示をしていただいた作家さんと旧万善薬局の赤木さんとの共同作業の結果生まれた作品群の素晴らしさが嬉しいです。倉庫の片づけから始まって作品の完成までこぎつけた間の労力と情熱に感謝しています。
（10. 堂本清文）

きょうは、かめやまトリエンナーレにいってきました。こうゆうのがアートなんだーとおもいました。
わたしもしてみたいとおもいました。
おかだやさんっていうところがとくにすごいとおもいました。
すごかったです。
あしたもいきたいなーとおもいました。
亀山西小学校　１年　はっとりかなで

わが街を若き力が変えてゆく
静かな街に　人ぞあふるる

亀山市在住　伊藤宣之

亀山トリエンナーレ 2017 を終えて

亀山トリエンナーレ 2017 事務局長　森　敏子

商店街を続々と歩く人の波。
舘家の玄関には人があふれて、道路に行列が出来ている。
国内外から 102 組のアーティストが参加して開催された亀山トリエンナーレ 2017。
夢にみた光景が目の前に現れました。
―昨年より実行委員会と行政の協働で取り組み準備し、たくさんの方々に応援していただきました。
改めて、ここに皆さまにお礼を申し上げます。

ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

亀山で展示してくださった若いアーティストたちのどの方も「いい経験になりました。
亀山を糧にしてこれからも頑張ります。」と言ってくださったこと。
参加アーティストたちが、みんな仲良しになってくださったこと。
海外から来日したアーティストから「夢に見た展示会場！」と言われたこと。
街の人たちが私に「森さん、最終日まで体に気をつけて。商店街を元気にしてくれてありがとう。」
と声をかけてくださったこと。
シンポジウムなどの参加者が亀山の街や今後の活動について真剣に考えてくださったこと。
行政の皆さまや、市民の方々が積極的に亀山のお茶を使って来場者のおもてなしをしてくださったこと。
多くの皆さまが (お会いしたことのない人たちまでもが) ボランティアの申し出
をしていただき支えてくださったこと。
「森さん！」「先生！」と思いがけない方々が総合案内所に会いに来てくださったこと。
監修の井上さんから「よく頑張りました。」と言っていただけたこと。
(いろいろご心配をおかけしました。)
家族、親戚、絵描き仲間、友人、展示場所の大家さん、実行委員の皆さんたちが支えてくださったこと。
亀山で若い世代のアーティストや、素晴らしい若者と知り合えたこと。
地元のお店の人から「おかげさまで賑わっています」と声をかけられたこと。
取材に訪れたメディアの皆さんから「楽しい取材です。いい取り組みですね。」と言っていただけたこと。

思いだすと、まだまだ書ききれないことがいっぱいです。
何よりたくさんの人々の笑顔に出会えたことが嬉しかった！
これら、すべてが人生のタカラモノです。ありがとうございました。

いつもの静かな商店街に戻ったけれど私は確かにこの街に生き、この街を愛しています。
今までも、ずっとこれからも。
私なりの生き方を亀山で具現化していきたいです。

事務局として皆さま方にご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思います。
至らなかった点、お許しください。
ご協力ありがとうございました。

メディア・広報物

新聞記事

2016年(平成28年)4月9日(土曜日)

亀山トリエンナーレ'17

芸術作品を町並みに

ポスターと募集要項

発送作業に励む

◀2016年4月9日
中日新聞

◀2016年5月15日
毎日新聞

2016年9月13日
▼中日新聞

2016.9.13 中日新聞 朝刊

来年「亀山トリエンナーレ」地元作家ら111人出展

作品写真などが並べられた応募書類を審査する実行委員ら＝亀山市東町の市民協働センターかめで

◀2016年4月9日　伊勢新聞

商店街展示 出品者募集

「亀山トリエンナーレ2017」開催に向け美術作家の参加を呼び掛ける伊藤委員長（左）と森敏子事務局長＝亀山市東町の市市民協働センターで

▼2016年10月10日　中日新聞

出展作家が会場を視察

来秋・亀山トリエンナーレ前に

展示場所の視察をする出展作家たち＝亀山市西町で

2016年(平成28年)10月25日(火曜日)

亀山トリエンナーレ2017 地元出身の出展作家 山路慎也さん(22)＝大阪市

美術の本質は多元性

つっぱしり

▲2016年10月25日　中日新聞

2017年(平成29年)1月6日(金曜日)

今年こそ！ 2017 鈴鹿・亀山

亀山トリエンナーレ実行委事務局長 森 敏子さん(68)＝亀山市

準備3年 わくわく

▲2017年1月6日　中日新聞

魂の芸術 感じて

障害者施設で絵画創作

亀山トリエンナーレ 菅尾さん 参加作家に

◀2016年
11月26日
中日新聞

出展作家が打ち合わせ

秋の亀山トリエンナーレ

2017年▶
5月15日
中日新聞

芸術家ら亀山探索

9月のトリエンナーレ向け

▲2017年5月15日
伊勢新聞

9月に亀山トリエンナーレ

実行委ら準備、打ち合わせ

2017年7月26日▶
伊勢新聞

国内外の102組が参加

亀山トリエンナーレ

ポスター、チラシ完成

▲2017年9月1日
中日新聞

亀山トリエンナーレ 24日開幕

作家の息吹 街中に着々

2017年▶
9月20日
中日新聞

亀山トリエンナーレ2017きょう開幕

芸術の祭典 華やかに

◀2017年9月24日
中日新聞

2017年9月25日
▼中日新聞

現代アート街彩る

亀山トリエンナーレ

◀2017年9月26日
読売新聞

街中に絵やオブジェ

亀山トリエンナーレ開幕

◀2017年
9月24日
朝日新聞

亀山がアートに染まる秋

海外含む102組出品■商店街活性化狙う

彫刻に触れ迷路のぞく

亀山トリエンナーレ

◀2017年9月27日
中日新聞

2017年9月25日
▼伊勢新聞

亀山トリエンナーレ始まる

3年に1度の芸術祭

若手芸術家の登竜門 市内各地に作品展示

◀2017年10月2日
中日新聞

若手が夢かなえる場

商店街で現代芸術祭8回

8日に披露

芸術ダンス

亀山東小児童 練習

◀2017年10月4日
朝日新聞

枠組み 軽やかに横断

亀山トリエンナーレ2017

中日新聞2017-9-29

アートと出合い 街の新たな魅力

「亀山トリエンナーレ」15日まで

作家の一連のポップコーンにちなむ作品

若手美術家の作品を展示する「亀山トリエンナーレ2017」が、亀山市東町西日野と鈴鹿市南若松地区の旧家などに開かれている。15日まで。

市内を芸術祭にしようと、関係者たちが「アート」と「まち」を結びつけ、毎年実施している。第3回は14から3年に1度の開催となる。今年は、地元ゆかりの作家や、鈴鹿・亀山ゆかりの若手作家ら、一人の絵が参加した。

豊田地区市文化財の旧家で、加藤家屋敷などが会場になっている。絵画には、見る人と家屋の空間が共有できる場を表現したという作家らの多種いろいろの機械ポップコーンにつながる作品（パフォーマンスは土、日、祝日のみ）がある。

加藤家には、外国人作家が石と鉄を組み合わせて、関係者たちが「アート」と「まち」を結びつけ、毎年実施している。第3回は14から3年に1度の開催となる。今年は、地元ゆかりの作家や、鈴鹿・亀山ゆかりの若手作家ら、一人の絵が参加した。

豊田地区市文化財の旧家で、加藤家屋敷などが会場になっている。絵画には、見る人と家屋の空間が共有できる場を表現したという作家らの多種いろいろの機械ポップコーンにつながる作品（パフォーマンスは土、日、祝日のみ）がある。

加藤家には、外国人作家が石と鉄を組み合わせて、関係者たちが「アート」と「まち」を結びつけ、毎年実施している。第3回は14から3年に1度の開催となる。今年は、地元ゆかりの作家や、鈴鹿・亀山ゆかりの若手作家ら、一人の絵が参加した。

石と鉄を組み合わせて枯れ山水の庭園を表現したという外国人作家の作品＝いずれも亀山市

わけ使用し、枯れ山水の庭園を表現するなど、風景を公開されている。（加藤勝也撮影）

道路でアートイベント

亀山トリエンナーレ

【亀山】亀山市内の店舗、造形を展示会場に開催している、公募型現代美術の祭典「亀山トリエンナーレ2017」（九月二十四～十月十五日）は、期間中の八日、同市東町商店街の道路約八百㍍が歩行者天国となり、アート芸術家らによる公開制作＝亀山市東町商店街で

イベントが開かれた。市内外から多くの人らが訪れ、芸術の秋を楽しんだ。

同実行委員会主催。会場となった道路の各所では、芸術家らによる彫刻、パステル画などの公開制作や似顔絵、創作ダンスのパフォーマンスなどがあった。また、亀山木材産業協同組合の協力で木片を利用した時計づくりもあり、にぎわっていた。

大阪市から芸術作品の鑑賞に訪れた、秋山愛里さん（三）は、「全国各地のトリエンナーレに出向いては楽しんでいますが、空き家や古舗に展示されている作品一つ一つに心がそそられた。初めて亀山に来たが、まちとの融合がいいですね」と話していた。

▲2017年10月9日
伊勢新聞

中日新聞2017年10月25日

渡の詩

ロックバンドのTシャツを来た青年、一眼レフのカメラを首に下げた美大生風の女の子。今月中旬、亀山市中心部の商店街に足を運ぶ、普段いないタイプの若者を大勢見かけた。

九月二十四日から二十二日間、市中心部を現代芸術作品が彩った「亀山トリエンナーレ」。国内外の作家が店先や空き店舗に絵画やてきとう工芸作品を並べた。今風の若者たちは写真を撮ったり、散策をしたりと思い思いに楽しんでいた。

亀山で生まれ育ったという年配の女性は「地元が普段と違う雰囲気になるのも、若い人が集まるのもすごい」と笑顔を見せた。「地域の盛り上げ方っていろいろあるんですね」とも。

期間中は延べ二万人が来場し、県外からも多くの人が訪れたという。「次はどんな作品が並ぶんだろう」。三年に一度のトリエンナーレ。楽しみにしている人はあちこちにいる。（鈴鹿雄大）

中日新聞2017-10-12

ダンスで出会い表現

箕浦 慧さん(31)

▲2017年10月12日　中日新聞

メキシコ 亀山 つなぐ芸術

出身作家 被災支援に感謝の寄贈

トリエンナーレ 募金で涙

▲2017年11月23日　中日新聞

中日新聞2017年10月13日

商店街に活気再び

松岡 歩未さん(28)

◀2017年
10月13日
中日新聞

メキシコ 亀山つなぐ作品

出身作家 被災地支援に感謝 市へ寄贈

▲2017年11月22日　中日新聞

中日新聞三重総合2017年11月26日

市文化会館に寄贈

亀山トリエンナーレ出展作品

寄贈されたファルコンさんの作品。左から森繁熊義長、川戸館長、木原さん＝亀山市の市文化会館で

2017年
10月11日
中日新聞 ▶

ウィリアム・ノートンさん(65)＝米国

日本的な魂 感じて

2017年
10月9日
中日新聞▶

商店街で歩行者天国

亀山トリエンナーレ

亀山市で開催中の現代芸術の祭典「亀山トリエンナーレ」の歩行者天国イベントがハ日、同市東町の東町商店街であり、路上でスケッチやダンスをする人らでにぎわった。

歩行者天国は、現代芸術を身近に感じてもらおうと企画した。

東京を中心に活動するコンセプチュアルダンス集団「ステファニーさん」（三）による公開制作（ライブペインティング）では、道路に広げた長さ二十㍍の紙にハケや手でペインティングする様子を、多くの人が足を止めて見入っていた。

メインイベントのダンスパレードでは、亀山東・西小学校の児童約四十人によるダンスパレードもあり、先月末から学校で練習した成果を披露した。

パレードを見た主婦の清木知佳さん（三）＝同市南町＝は「今回のイベントで子どもたちは商店街を身近に感じたのでは。昔のような活気が戻ってほしい」と話した。（鈴木里奈）

路上で公開制作するステファニーさん＝亀山市東町の東町商店街で

トリエンナーレ開催

亀山市 十大ニュースを発表

亀山市の桜井義之市長は二十日、会見で「〇七年の市の十大ニュース」を発表した。桜井市長は市政の基本方針をまとめた「第一次総合計画」が始動した「とい スタートが切れた」「将来へ展望する活力の胎動が始まっている」と振り返った。

「かめやまで文化年」として市内で現代芸術の祭典「亀山トリエンナーレ」などが開催され、文化に親しむ事業の拡大（十月）▽川崎小学校運営協議会コミュニティスクールが文科大臣賞受賞（十二月）▽関西線亀山＝柘植間が運転を見合わせたことについて「被災された皆さまに心よりお見舞い申しあげる」と述べた。同区間は来年一月九日に運転を再開する予定。（鈴木里奈）

◇十大ニュースは次の通り

桜井市長3期目スタート（2月）▽第2次市総合計画始動（4月）▽市立図書館センター開設（同）及び保育所処分移行（10月）▽かめやま文化年2017の開催（4月）▽亀山・関テクノビルズへの進出企業と立地協定調印（6月）▽地域子育て制度の導入（同）▽県内初、歯周病検診の対象年齢拡大（7月）▽市図書館整備基本構想の策定（同）▽台風21号の影響による被害の拡大（10月）▽川崎小学校運営協議会コミュニティスクールが文科大臣賞受賞（12月）

◀2017 年 12 月 28 日
中日新聞

大台出身の作家 亀山で展示

大理石製「踊る鶴亀」

亀山市内で開催され た現代芸術の祭典「亀 山トリエンナーレ」の期間中、東町商店街内の「東町ふれあい広場」で公開制作していた大台町出身の作家森本鈴月さん（三十）の大理石作品が完成し、同市東御幸町の市文化会館一階ロビーで展示されている。十二月二日まで。

作品は十一月初めに完成。「ワルツ」と題し、縦約八十センチの白い大理石を削って、二羽のツルとカメが踊っている様子を表現した。

森本さんは「商店街や来場者の皆さんに見てもらったり、差し入れをもらったりして、うれしくありがたかった」とコメントした。（鈴木里奈）

ツルとカメが踊る様子を表現した彫塑＝亀山市東御幸町の市文化会館で

◀2017 年 11 月 29 日
中日新聞

雑誌
・
WEB

亀山トリエンナーレ2017

公募によりノミネートされた若手作家の登竜門的な現代アートの祭典。東海道の宿場町として栄えた亀山の古い商家や武家屋敷、昭和の香りただよう商店街や民家などが舞台となる。アート鑑賞と街歩きを楽しもう。

【会期】9/24～10/15
【会場】三重県亀山市内各所
¥無料 【アクセス】JR関西本線「亀山駅」から徒歩15分
?亀山トリエンナーレ2017実行委員会事務局 0595-82-4125
http://kameyamatriennale.jp/

写真：三木みどり（Popcom Bath）

＼まだまだある！／

注目の芸術祭

2017夏秋

旅のついでにアートを楽しみたい、という人におすすめの今年夏秋開催の芸術祭を紹介します！

雑誌『momo』vol.15
2017 年 6 月 5 日発売 ▶

友だちにシェアする

◀LINE マガジン『TOSS !』
第 35 号
2017 年 8 月 21 日配信

COLUMN

'17年9月24日～10月15日「亀山トリエンナーレ2017」開催

亀山市で開催される現代アートの芸術祭。亀山市東町と西町の旧東海道沿いの商店街や旧家などで、若手芸術家の作品を展示する。映像、インスタレーション、パフォーマンス、ダンス、ワークショップなど、多彩な作品を楽しもう。

0595-82-4125（亀山トリエンナーレ実行委員会事務局）
亀山市中心部（商店街・東海道沿いの建造物や公園など） 9:00～17:00
期間中無休 無料 周辺駐車場利用

▲雑誌　ぴあ　東海版
2017 年 3 月 16 日 号

三重県亀山市 9月に亀山トリエンナーレ 実行委ら準備、打ち合わせ

伊勢新聞

▲スマホアプリ SmartNews
2017 年 7 月 29 日配信

▲ 雑誌 ELLE japon3 月号
2017 年 2 月 5 日 発売

VOGUE

Home › Lifestyle › Culture › 2017年秋にスタートする注目の芸術祭3。【後編】

亀山トリエンナーレ2017

城下町を舞台に繰り広げられる、新人アーティストの「登竜門」。

「亀山トリエンナーレ」は、新人作家の「登竜門」を目指す現代美術の祭典だ。「アート」と人との出会いを通して、街の新たな魅力を引き出すことを目的に、2008年からスタート。14年からは3年に一度開催されており、かつて東海道の城下町、宿場町として栄えた三重県亀山市の旧東海道沿いの商店街の空き店舗やアーケード、旧家などが若手芸術家の発表の場となる。

9月24日（日）から開催される「亀山トリエンナーレ 2017」では、公募により選出されたアーティストのほか、監修者の井上隆邦氏の推薦する作家など計102組が参加。国内はもとより、アメリカ、メキシコ、英国、オーストラリアといった国々のアーティストも参加し、旧商家、加藤家屋敷をメイン会場に、亀山市内の店舗、空き家、倉庫、文化財建造物など約40の場所に作品を展示する。

作品は平面や立体、映像などのアート作品に留まらず、パフォーマンスやワークショップも実施。陶器や魚網によるインスタレーション、紙土細工による100体の妖精のオブジェ、プロレスをテーマとする日本画など、個性豊かな作品が古代から交通の要所であった亀山の街をにぎわせる。ポップコーンであふれたバスタブでのパフォーマンスやコンテンポラリー・ダンスによるアニメーション作品の公開も予定されている。

亀山トリエンナーレ 2017
会期／2017年9月24日（日）～10月15日（日）
開場時間／10:00～17:00
※最終日は～16:00
会場／三重県亀山市 商店街、旧東街道沿いの民家、寺社、市指定の文化財「旧家」や「加藤家」など

▲VOGUE HP
2017 年 9 月 1 日付け

▲Bellve（ベルブ）
2017 年 9 月号

テレビ ラジオ

三重テレビ ▶
「ニュースウィズ」
9 月 26 日 放送

◀CBC ラジオ
「丹野みどりのよりどりっ！」
9 月 29 日 放送

ZTV ▶
「金曜お昼は生放送」
9 月 29 日 放送

◀レディオキューブ
FM 三重
「Weekeng Cafe」
10 月 14 日 放送

◀ZTV「えーやん」
“KSG 今日はどこいこう！”
10 月 1 日〜15 日 放送

中京テレビ▶
「真ん中チューキョー」
2016 年 11 月 28 日〜12 月 2 日　放送

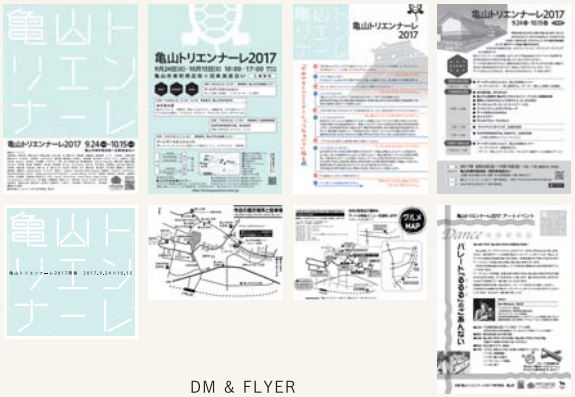
その他

- 三重テレビ「とってもワクドキ！」2 月 26 日放送
- 三重テレビ「ニュースウィズ」5 月 1 日放送
- 亀山行政チャンネル「マイタウンかめやま」9 月放送
- NHK「ほっとイブニングみえ」9 月 29 日放送
- 亀山市広報　9 月号、11 月号
- 市民活動ニュース　第 194 号、196 号
- 地域創造レター　9 月号
- 亀山市立東小学校 HP
- 朝日新聞デジタル　9 月 24 日付け
- meviy 公式ブログ「亀山トリエンナーレ」現地レポート　11 月 13 日付け
- ネット TAM（アートマネジメント総合サイト）10 月 12 日付け
- イオン情報誌 mom　2016 年 10 月号

広報物

T shirt

POSTER



DM & FLYER

BANNER

OFFICIAL MAP & SCHEDULE

ご協賛いただいた皆様

（順不同・敬称略）

スズカ画廊
Cassia
平松敬子
森川さえ子
横山典子
森本薬品
堀井米穀店
堀井機管工業
久画廊
アトリエ風人来房
大和印刷
伊藤龍彦
コミュニティ CAFE ぶんぶん
関の戸（深川屋）
お茶のかねき
ネイルサロン Chouette
美術教室あとりえタム
長縄功太郎
パンダクレープ
井上隆邦
CAKE-HARA
三好
森久高
川森食堂
トラットリア　イルテルノ
大岡療術院
宝塚大学東京メディア芸術学部
猫の館
庵心館
ファッションリフォーム　ぴえろ
亀山急送
堀田建設
山内建設
安全
亀山市観光協会
亀山商工会議所
小菅金物
野間秀一
なかの木材
北伊勢上野信用金庫
第三銀行
百五銀行
三重銀行
しぼりや
子ども絵画教室アトリエ エピ
匿名２名

お世話になった皆様

（順不同・敬称略）

[東町商店街・西町地区の皆さま]

法因寺庭　はんの清水　元荒川楽器店　プランタンさかきや　サラダ館　森本薬品　なかや本店　阿部宅
JD スタイル　肉のむかい　元中村商店　元男子専科一二三　喫茶佳　高村書店　7days アートギャラリー
アートガーデン崖の上　青木倉庫　山形屋酒店　ナガイ種苗店倉庫　遍照寺　今井家　元山田靴店
元ユリ理容室　元万善薬局別邸　誓昌院門　岡田屋本店ギャラリー　月の庭　猫の館　しぼりや
増田ハツミ　廣森勲　赤木清

[ボランティア・実行委員の皆さま]

伊達エリンダ幸江　寺村眞一　西川真紀　國分千紘　渡瀬恵子　雲祐子　黒江めぐみ　森健太郎　岡田晴貴
西部隆哉　米田恭子　村林葉子　村林幸穂　豊田敬一　長田美恵子　山内百合子　中島巨樹　中野悦孝
平松敬子　森川さえ子　服部厚子　大河内沙友美　中谷典子　豊田千賀子　松本恭子　小椋美恵　志賀澄子
内藤千加子　北村真紀　高尾佳代子　太田みどり　豊田博子　ピアニストＫ　山路慎也　岩谷唯奈　森下悦子
青木繁　井谷うらん　市川雄康　伊藤幸一　伊藤龍彦　伊藤弘樹　伊藤峰子　今岡翔平　大岡英介　岡田桂織
岡本優希　小倉咲穂　内山一成　倉岡としえ　倉岡雅　CAKE-HARA　小菅まみ　小畑田夏樹　小坂一　小林恵太
櫻井大吾　嶋村明彦　瀧本麻須美　田村公男　堂本清文　冨松みね子　長縄功太郎　長谷川温士　林千代　平松典子
福沢美由紀　藤田ハナ　藤田昌久　森敏子　森久高　森博幸　森中康夫　松岡歩未
かめやま若者未来会議　ウラカタ株式会社　Ｇｒｉｐ柔術チーム　アートグループ majo＋　亀山みそ焼きうどん本舗
亀山市市民協働センターの皆さま　かめやま文化年ボランティアの皆さま　生甘堂　倍音人Ｒｏａｄ　Ａｇｅｈａ
亀山市まちなみ文化財室の皆さま　　亀山市文化スポーツ室の皆さま　（一社）亀山青年会議所
日本茶インストラクターの皆様

[デザイン協力]

伊藤弘樹　井谷うらん

[写真・映像撮影・写真提供]

瀧本麻須美　森中康夫　ＫｏｕｊｉＮａｋａｔａｎｉ　藤田ハナ　山路慎也　森久高
伊藤幸一　亀山トリエンナーレ実行委員会

[資材等提供]

なかの材木店　元星栄電化　森本薬品　しぼりや　小菅金物㈱　伊達製茶　岡田屋本店　山廣商店

編集後記

「次のアートはいつやるん？」
この間、近所のおばちゃんにこう聞かれました。
その言葉に私は、街の人がアートに親しみを持ってくれていること、心待ちにしてくれていることに驚きと嬉しさでいっぱいになりました。
アート亀山から今年で 10 年。今まで亀山を盛り上げ支えて来てくださった先人の方たちに改めて感謝申し上げます。
また、一緒に亀山トリエンナーレ 2017 を成功させた仲間を誇らしく思います。

ひょんなことから記録誌の作成を担うことになり、それからというもの私の生活・環境は一変しました。
森事務局長をはじめ実行委員会の皆様と知り合い、またそこから新たな出会いが生まれ、より亀山に、
亀山トリエンナーレに対し親密になれました。
初出展の私に大役を与えていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

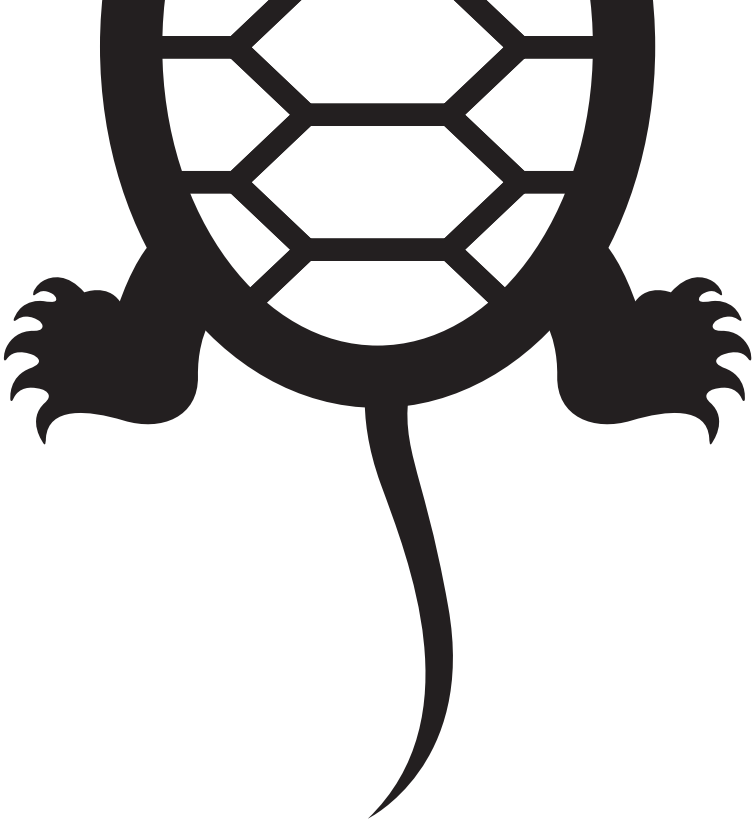
次は 2020 年、一市民として、作家として楽しみでなりません。

2018 年 3 月吉日　松岡歩未

[主催]　亀山トリエンナーレ 2017 実行委員会・亀山市
[監修]　井上隆邦

[後援]
亀山市東町商店街振興組合
（公財）亀山市地域社会振興会
亀山商工会議所
（一社）亀山市観光協会

かめやま文化年 2017”まち勢む”かめやま芸術祭参加事業



亀山トリエンナーレ 2017　記録誌

発行日　2018 年 3 月 31 日
発行者　亀山トリエンナーレ 2017 実行委員会
事務局　〒519-0137　三重県亀山市阿野田町 1060
tel.0595-82-4125
URL　http://kameyamatriennale.jp　instaglam/# 亀山トリエンナーレ 2017
編集　伊藤弘樹　今岡翔平　大岡英介　松岡歩未　森敏子

禁無断転載　Printed in Japan

MEMO